

第3回 SGRAチャイナ・フォーラム

「一燈やがて万燈となる如く」

アジアの留学生と生活を共にした協会の50年

■ フォーラムの趣旨

2006年に北京大学で開催したパネルディスカッション「若者の未来と日本語」、2007年に北京大学と新疆大学で開催した緑の地球ネットワーク高見邦夫事務局長の講演「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」に引き続き、中国で開催する3回目のSGRAフォーラム。今回は、50年にわたり東京で留学生の受け入れ態勢の改善に取り組んできたアジア学生文化協会の工藤正司常務理事に、協会の創設者穂積五一氏の思想とアジア学生文化協会を通して見た日本とアジアのつながり、そして民間人による活動の意義をご講演いただきます。日中同時通訳付き。SGRAでは、民間人による公益活動を、北京大学をはじめとする中国各地の大学で紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。

SGRAかわらばん

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週2回（火・金）、電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、SGRA事務局にご連絡ください。

プログラム 第3回
SGRAチャイナ・フォーラム

一燈やがて万燈となる如く アジアの留学生と生活を共にした協会の50年

日 時	2008年9月26日(金)午後3時～6時	2008年9月28日(日)午後2時～5時
会 場	延辺大学総合棟七階報告庁	北京大学外国语学院民主楼
主 催	関口グローバル研究会(SGRA)	
協 力	(財)アジア学生文化協会、北京大学日本言語文化学部、延辺大学アジア研究センター	
協 賛	(財)双日国際交流財団、国際交流基金北京日本文化センター、(財)渥美国際交流奨学財団	

講演

7

工藤正司 財団法人 アジア学生文化協会 常務理事

講演要旨

戦前の日本に対する反省に立って「新しい戦後日本」を構想して設立された(財)アジア学生文化協会と創設者穂積五一氏の思想。その後の協会の展開と私自身の人生転換、そして戦後日本の歩んだ実像。「戦前の日本」へ回帰傾向を強める現代日本と協会の危機。民間人による活動の意義と課題。

あとがき 今西淳子—— 30

アンケート—— 33

第三届SGRA中国论坛 一灯燃亮万灯 (中文版)

39



延边大学 Yanbian University



北京大学 Peking University



一燈やがて万燈となる如く

はじめに	7
アジア文化会館(ABK)と創設者の思想 組織と施設・事業	
財団法人	8
何をするところか?	9
学生文化会(SCA)の結成	9
ABK同窓会の展開	10
創設者	
穂積先生の敗戦前	12
煩悶からの脱出	13
戦争の下で	14
敗戦を迎える	14
人間的魅力・人柄	16
建設秘話—新中国との留学生交流	18
公益事業を民間が行うこと	
穂積先生との出会い	19
アジアの留学生とめぐり合って	21
忘れがたい部屋	22
民間人が何故やるのか	24
おわりに	
自由にものが言えない	25
留学生30万人計画	26
新しい研究姿勢	28

講師略歴

■工藤 正司【くどう・まさし】KUDO Masashi

【略歴】1943年5月、山形県に生まれる。1968年3月、東京大学大学院修士課程卒業(専攻は電子工学)。在学中に穂積五一氏の主宰する学生寮「新星学寮」に入り、ベトナム等アジア諸国の留学生の問題に遭遇し、日本とアジア諸国に横たわる歴史的・社会的问题に关心を深め、人生航路を変える。1968年4月、穂積氏創設の(財)アジア学生文化協会に入職。現在に至る。

講
演

一燈やがて 万燈となる如く

—アジアの留学生と生活を共にした協会の50年—



講師 工藤正司 (財団法人 アジア学生文化協会 常務理事)

はじめに

ご紹介いただいた工藤です。皆様、お出でいただき本当に有難うございます。

私が皆様のお国、中国を訪問するのは、1988年秋以来のことと、20年ぶり、2回目です。

この間、お国は、人類史上例を見ないような、劇的でかつ大規模な変化を遂げ、つい先頃はオリンピックも成功裡に終えました。どのような社会・人々になっているのか大変興味をもって今回訪問しました。

このように、お国の発展ぶりに讃辞を送ることからお話を始めることになるのですが、私の本当の心を申しますと、それよりも前に、私の国・日本が過去に皆様のお国に行なったことをお詫びさせていただきたい思いです。本当に申し訳なく残念なことですが、苦難の中で、犠牲になった人々が元に戻ることはあります。せめて、犠牲者を弔い、靈を慰めないではいられません。

ところで、世の中には、私たちが社会生活を円滑に行なう上で不可欠なことであっても、収益が見込めず、民間にそれをやる者が現れそうもないようなものがあるものです。公益事業とは、主にそういうものなのですが、それらは、国や地方自治体がやることになるわけです。ですから、国や地方自治体は、公益事業の典型的でかつ最大の担い手なのです。しかし、民間の中にも、そういうことに敢えて取り組む者があるわけです。

今日、私に与えられたテーマは、「公益事業を民間が行うこと」について、私の仕事の場であるアジア文化会館（略してABKという）の事例を紹介することです。

そして、経済的利益の得られない公益事業に、民間が何故取り組むのかということを、ABKの創設者である穂積五一という人間を例に、紹介することです。

「それでは、君はどうなんだ」と当然追及されるでしょうから、私自身の経験も、加えさせていただくつもりです。そして、最後に、今日の日本について、私が感じていることを若干触れたいと思います。その後質問を受けたいと思います。

ただ、最初にお断りしておきたいことは、日本とお国とでは、国情が違うということです。特に公益活動に対する政府の立場、性格も、そして、政府と民間の関係も違いますし、歴史に対する責任も違いますから、それらを十分踏まえて、お聞きいただきたいということです。よろしくお願ひします。

アジア文化会館(ABK)と創設者の思想

組織と施設・事業

■財団法人

私が仕事をしているところは、財団法人アジア学生文化協会といいます。ABKは施設・建物の名前で、ABKを建設し運営している組織が、財団法人アジア学生文化協会というのです。

ABK全景



名称の前に付いている財団法人というのは、株式会社などと同じく、法律によって社会的に人格が認められたもので、任意団体とは違って、正式に契約を結んだり、保証人になったりすることができます。ただし、株式会社と違って、経済活動をするためのものではありません。

公益の利益に寄与する目的で活動するということで、設立を許可されるもので、経済的には、前もって資金を用意して、その利息を収入として活動するのが基本です。その代わり、税金を免除されたりして、経済的に色々と優遇されているのです。

これには、政府が設立するものや設立後の運営に政府が補助金を出しているものもあれば、政府と関係のない純粋に民間のものもあるのです。

私の仕事をしている協会は、民間人が設立した、政府の補助金を受けていない純粋に民間のものです。それで、いつもピーピー貧乏しています。

ところで、アジアと付いていますが、これは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカを包含する意味で使っています。つまり、植民地支配を受けたり半植民地に置かれて苦難の道を歩んで、独立を果たした発展途上国を代表して、アジアと呼んでいることを、ご理解ください。

この財団法人の設立には、幾つかの要因がからんでいましたが、実は、その一つは、皆様のお国、新中国との留学生交流に備えるためでした。

のことについては、後程、順を追って触れたいと思います。

■何をするところか？

では、私たちの財団は、何をするところかと言いますと、日本に留学するアジア諸国の学生青年を社会的に支援することです。具体的には、宿舎や奨学金など生活面のこと、ビザなど法令面のこと、あるいは日本人の中にあるアジア人に対する差別意識を変えてゆく問題など色々です。

それでは、何故、留学生を支援するかと言えば、日本およびアジア諸国の人々が、互いに交流することを通じて、理解し合い、人間的に和合することを促進して、アジア諸国の独立と平和な環境の中での発展、ひいては世界の平和に貢献したいからに外なりません。留学生は、異なる文化を吸収して祖国社会の発展と、より広いアジア地域の平和的発展のために協力の輪を広げる大きな可能性をもっていますから、それに期待しているわけです。

■学生文化会（SCA）の結成

ABKは、1960年6月事務所を開いて、留学生の入館は7月1日からと決めていたのですが、面接を終えていた留学生たちは待ちきれずに、6月末にはドンドン入ってきてしました。

そして、一番最初に行った活動は、7月初めの日曜日の朝、在館生（留学生、研修生、日本人学生）と職員皆が集まって、「学生文化会」（SCA）という学生と職員からなる自治会をつくったことでした。

これが、ABKを、当時とその後できたほかの留学生会館と非常に違うものにしたのです。今日、私が、皆さんにお話するために、お国を訪問できたのも、元をたどれば、そのお蔭と言ってもいいかもしれません。ABKの運営を民間による公益事業の一つの典型とする原点となったものなのです。

学生文化会(SCA)の風景
(ASIA61)



SCAの会合は、毎月1回開かれ、SCAの運営のルールを決めただけでなく、会館運営の骨格も全て決めたのです。例えば、ABKの定員は110名で、そのうち技術研修生が80名、留学生用が30名だったのですが、30名の留学生用の部屋に入れる人数を、「1ヶ国2名以内とする」こと、「門限を夜中の12時にする」こと、そして、冬の暖房を入れる時間を朝の何時から夜の何時までとすることとか、食堂のメニューとそれぞれの値段を何円にするかなど全て、SCAの会合で決めたのです。

それは、在館生と職員が平等な立場で参加する自治会で、共同生活のルールについて意見を出し合い、決まったら、それに基づいて職員は仕事をし、在館生は自らの生活を律するというもので、創設者の穂積先生（後で詳しく触れます）が、会館での生活を「全ゆる個人、全ゆる民族の自主・平等」を原則として行おうとしたことによるものでした。

「事務所が管理運営のルールを決めて、学生はそれに従って住むだけ」というのではなく、ABKを、学生たちが自主性を発揮して生活できる場にしようとしたのです。そして、国の人口の大小にかかわらず、それぞれの国的学生が平等に生活できるよう、1ヶ国2名以内とするというルールになったのでした。

■ ABK 同窓会の展開

ABKでの生活は、本当に素晴らしいものになりました。4年後、ABKでの生活を経験して帰国したO B、O Gの間に、自発的に、「ABK同窓会」ができました。

ABK同窓会は、ABKでの自治的な共同生活の経験を基に、お互いの親睦を深めることを基本のテーマとしていますが、更にメンバー各人が帰国後、自国社会

の発展のために協力して力を合わせるためのもので、ねらいはむしろ後半に置かれているのです。

創設者の穂積先生は、この「ABK同窓会」が、帰国した留学生・研修生によって自発的に結成されたことに大きな期待を寄せ、「自発的に、自國社会の発展のために力を合わせる」という青年の理想が「ABK同窓会」のメンバーの枠を超えて、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの人々の心に拡がることを願がって、「一燈やがて万燈となる如く」と表現しました。

一人の心の中に灯った理想の火が、次々と他の人の心に共感を呼び、一燈又一燈と、あたかも、ローソクの火が、次から次へと点火されて、広がって行く様を連想したものです。

理想の火は、あくまで個人の心に灯るもので、火を灯すか否かは、各個人の主体性にかかっているわけです。個人の自主性を尊重し、そこに期待している思想から出ている表現です。「全ゆる個人、全ゆる民族の自主・平等」を原則とする穂積先生の思想・ABKの思想から出ている表現といえます。

A B K 同窓会代表者会議



従って、ABKの本当の成果は、このABK同窓会の働きにかかっていると言つてよいでしょう。今日の私のお話の題名が、そうなっているのも、お分かりいただけたのではないでしょうか。

例えば、タイのバンコクでは、「反日運動」が広がった時期に、同窓会が中心となって日本側政・財界と話し合い、日本側がタイの自主性を尊重する新しい経済協力の理念と方式を打ち出したのを受け入れて、技術移転センターをつくって、タイの民族企業の技術発展に貢献し、大きく成長しました。

これは、TPA（泰日経済技術振興協会）と呼ばれるのですが、その後30数年間努力を続け、独自の活動と資金の蓄積の上に、去年、大学を建設するまでになりました。大学は、泰日工業大学(TNI)という名称ですが、日本の資金援助を受けず、独力で造ったものです。



TPA(泰日経済技術振興協会)



TNI(泰日工業大学)

創設者

■ 穂積先生の敗戦前

ABKの創設者は、穂積五一という人です。

この人の弟に穂積七郎さんという方がおります。今は、お二人とも亡くなりましたが、七郎さんという方は、戦後、日本社会党の代議士になって、日中国交復に努力されましたから、お国の方々には、弟の七郎さんの方がよく知られていて、皆様の中にもご存じの方があるかもしれません。

ところで、初めにお許しいただきたいことがあります。私たちは、日頃、創設者を「穂積先生」と呼んでいますので、自然にその言葉が出てしましますから、そう呼ばせていただきたいのです。よろしくお願ひします。

さて、穂積先生は、敗戦前は、一浪人として日本の社会を改革する運動をしていた人です。東京大学の法学部を卒業しましたが、仲間が、皆国家機関や大企業の主要なポストに就職していった中で、先生は一人、一度も就職したこともなく、結婚もしませんでした。ひたすら、日本社会の改革のことだけを追求したのです。結婚は、敗戦後のことです。44歳の時でした。

敗戦前の日本は、国内的に農村が大変貧しく荒廃していました。又、



穂積五一先生

国外では、お国はじめ、アジア全域に戦争を拡大して行きました。穂積先生は、このような日本の国のあり方はダメだと考えて、それを変えようとしたのです。

それは、明治維新以来の近代日本の体制を支えながら、内容的に社会を改革しようとするものでした。ですから、日本共産党等の左翼のめざした体制を倒す革命とは違います。思想的には、「國家社会主義」と呼べるものでした。



日本改造時代の先生

■煩悶からの脱出

穂積先生の生れた家は、愛知県の田舎の広大な山林を有する資産家でしたが、お父さんが、早く亡くなつた（穂積先生が2才の時で、享年52才でした）こともあって、その後、家族騒動が持ち上がり、最終的には、お母さんが実の息子の長男によって家を出されるまでになりました。穂積先生も、高校生以後は、お母さんと一緒に家を出されましたから、貧窮な生活を送った方です。

この家族騒動は、穂積先生の小さい頃に始まり長い間続いたので、幼い頃から穂積先生の心をひどく苦しめました。そして、中学を終えて高校に入る受験勉強中に、胸の病気にかかったのをきっかけに、「自分とは何か」「いのちとは何か」を問う深刻な悩みに落ちてしまうのです。そして、3年近くもの間、何も手につかない期間を過ごして、疲れ果ててしまったある日、突如「いのちとは何か」が分かったのです。これは、哲学的に「いのちの直覚」と呼ばれるものです。

いのちは、自ら生きるということを失うと、他からどのような援助の手を差し延べても、もう生き続けることができんね。これは、いのちの最も基本的な特質で全ゆるいのちに共通する原理です。これは「いのちの自立相」と呼ばれます。

従っていのちは、どのいのちも、自ら生きるという自立の原理において、平等なわけです。これは「いのちの平等相」と呼ばれます。ですから、いのちにおいては、自立相がそのまま平等相になっているわけで、「いのちの自立相と平等相が一つだ」ということを意味します。それが分かったことで、穂積先生は、悩みから抜け出すことができました。この「いのちの直覚」が、その後の穂積先生の、人間として生きる支えとなつたのです。

どのいのちも、自ら生きるという原理を奪われてはいけない。誰も、これを奪ってはいけない。その意味で、いのちは皆平等でなければいけないということになります。

しかし、現実には、いのちは他のいのちを害さないでは生きていけませんね。これは、科学的事実であって、哲学的真理と科学的事実の間に矛盾があることになります。ここから、自ら生きることにおいて、全てに控え目な、宗教的とも言える自分というものが生まれてきます。穂積先生の生活と社会改造運動は、そこにベースを置いているのです。

■戦争の下で

敗戦前に、日本は、皆様の地に「満州」という国をつくり、そこへ日本の農民を移民させる政策を推し進めましたが、穂積先生は、それに対して、「中国人の土地を強制的に取り上げて中国人の恨みを買うような移民には、絶対お手伝いすることはできない」と言って反対しました。当時、日本人は皆、日本の農村問題を解決する方法として、満州移民を当然のことと思っていたのです。日本の指導的立場にあった人で、反対したのは穂積先生ただ一人だったと言われます。自と他のいのちの関係を見つめた穂積先生だから、可能になったのではないでしょうか。

穂積先生は、お国に戦争を拡大する軍部の方針にも当然反対でしたし、アメリカとの戦争にも無謀なものと批判しました。しかし、アメリカとの戦争が始まつたからには「アジアを欧米の植民地支配から解放する戦争にするしかない。そうすれば、たとえ敗れても意味が残る」と言い、そのためには、「先ず、日本が朝鮮と台湾を植民地から解放することから始めなければならない」と主張しました。

今でも、日本人の多くが、この前の戦争を、「欧米の植民地支配からアジアを解放するためのものだった」と言うのですが、「日本が自ら植民地とした朝鮮、台湾を解放する」ということは言わないし、考えもしなかったのですね。穂積先生は、そこが全く違います。そして、実際に、朝鮮独立運動を進めていた朝鮮人青年をひそかにかくまい、援助していました。

実は、当時の日本には、戦争に反対しなかったり、賛成した人たちの中には、権力の圧力に屈してそうした人たちを別にして、2種類の人たちがあったのです。一つはアジアにおける日本の権益を「日本の生命線」と唱えて、これを守る、あるいは、これを拡張することを目的とした人々で、あの戦争を起こして推進した人たちです。もう一つは、当時の日本の指導層の腐敗・堕落によって日本社会に蔓延していた矛盾・困窮を改めるのに、戦争に備える体制づくりが有利に作用するとみた人たちです。当時、「戦争反対」と言えば、皆ぶち込まれて発言を封じられるだけでしたから、穂積先生も、「こんな状態では、戦争を戦うことはできませんよ」という言い方で、社会の改造に努めたのです。

■敗戦を迎える

しかし、穂積先生たちの運動は、日本人による自発的な社会改革という点では、結局、成果を上げることができませんでした。

このことについての反省が穂積先生等、この人たちにとって、敗戦後の出発点でなければなりませんでした。しかし、それを自ら行った人は極めて少なかったのです。ご存知の通り、敗戦後の日本は、アメリカの支配の下で大改革されました。大部分の人たちは、それに乗っかって、自ら反省することをどこかへやってしまったのです。

例えば、アメリカの支配が始まって2年程して、戦争指導者や国家主義者の公

職追放（ページ）がありました。その数約20万人で、穂積先生も国家主義者に入れられページされました。しかし、戦後の世界はアメリカとソ連の対立による東西冷戦が深刻化し、特に、朝鮮戦争が始まると、アメリカは日本の敗戦前の指導層の公職追放を撤回しましたから、多くがその後の指導者として、返り咲きました。アメリカの政策に追随してコロコロ変わってしまったのです。知識人、文化人と呼ばれる人々は、特に、ひどいものでした。

指導者や文化人と呼ばれる人々に今もついて回っているこのような軌跡・状況が、今日の日本という国の性格を見る上で重大なポイントと言わねばなりません。

穂積先生は、このアメリカの政策に左右されなかつた数少ない一人でした。公職追放を受けたまま、歴史的反省を深めたのです。

穂積先生が、敗戦した日本で、その後たどった道を見ると、最も重要なことは、西光万吉さんという方との深い交わりでした。

少し脇道に入りますが、皆さんは、日本に「被差別部落」という差別された人々の問題があるのをご存知でしょうか。同じ日本人ですが、一般の日本人から日常の付合いを一切断たれている人々がいるのです。特に、結婚や就職での差別は深刻です。

この差別は、過去の日本の歴史的な差別を、特に、封建的江戸時代に、政治的、法令的に再編・構成したもので、職業と関連して居住する地域を特定することによって、特定地域の出身者が差別される形で現れました。

明治維新後の近代日本では、法令的には廃止されたのですが、社会的には根強く残り、その後も変化してきたとは言え、現在も残っているのです。

日本に留学した人でも、そこまでは学ばないで帰国してしまう人が多いかもしれませんね。

西光さんという方は、その被差別部落の出身者で、現代日本でその差別をなくす本格的な「全国水平社」という運動を創始した人です。

穂積先生は、社会の改革という共通のテーマで、西光さんと敗戦前から知り合い、支え合っていた仲でした。穂積先生は、被差別部落出身の西光さんを遠ざけなかつたばかりか、その人間性の素晴らしさに打たれ、生涯尊敬し、親愛の情を深めました。そして、敗戦でピストル自殺を図り、果せずに半病人のようになった西光さんを励ましつづけ、共に歴史的反省を深めたのです。

そして、穂積先生は、後に、アジア等発展途上国から留学生と技術研修生を受け入れる機関を設立して、ABKを建設し、その運営に生涯をかけることになったのです。



西光万吉さん（左）と穂積先生

■人間的魅力・人柄

もう少し、人間的魅力というか、人柄・キャラクターの面から、穂積先生に触れておきたいと思います。

これまでの話からは、穂積先生という人は、とても謹厳で折り目正しい紳士然とした、どちらかというと堅苦しい人間のように思われるかもしれません。そういう面が無かったとは言いませんが、全く違う面ももっていた人です。

穂積先生は、これまでお話ししたように、敗戦前は、日本社会の改造運動を行っていた人で、東京大学の正門前の元下宿屋だった古い木造の家屋を「至軒寮」と呼んで、そこを拠点にして活動し、若い門下生たちと一緒に住んでいたのですが、それは敗戦後学生寮に転換され、名称も「新星学寮」と変えられました。それは、現在も続いている、実は、私は今そこに住み込んでいるのです。

新星学寮（旧）



その建物は、とても古いものでしたから、敗戦後暫くして建替えられましたが、相変わらず木造の、台所やトイレなど共同様式のものです。

穂積先生の住まいは、別棟になっていますが、学生寮にくつついでいて、1階は広間で、学生の会合は、いつもそこで開いていました。穂積先生は家族と共に、ずっとそこに住んで生涯を閉じました。

穂積先生は、仕事から帰ってくると、1階の広間の壁側に並べてある椅子代わりの細長い板の上に、下着姿で寝転がっているのが常で、時々はお灸をすえもらっていました。又、トランプめぐりで占いをしているのが習慣でした。指をつかうことで、頭の働きが活性化することを信じていたようです。

それに、大の暑がりで、夏はパンツ一丁で、それも端っこをたくし上げて、ゴロゴロしているのです。そして、迷い込んできた野良猫を可愛がっていたのですが、夏の暑い日は「猫の寝ているところが一番涼しいのだ」と言って、風通しのよい板の間にパンツ一丁で、猫と一緒に寝転がっているのです。

また、ABKでは、歩く先々でゴミが落ちていると、一人でそれを拾っていました。そして、食堂で学生が食べ残したりしていると、「ハシをつけたものは、残らず食べないといけないね」等と言って、自分でつまんで食べてしまうのです。



新星学寮（現在）



新星学寮（アジア諸国的学生が生活している。）

また、ABKで仕事をしていく一段落すると、大声で「工藤君、一緒に帰ろう」と私を誘った上、他の職員に向かって、「さあ、皆も帰ろう。仕事ばかりしているな!」などと大声で怒鳴るのです。

当時独身だった私は、穂積先生の寮の1室に住んでいましたので、年をめられた先生を一人帰すのもどうかと思って、時折お供したのですが、帰りたいのをガマンして事務仕事に頑張っている職員に、「それは、ひどい！」と思い、私は帰りづらくなるのでした。しかし、そう言ったのには深い意味があったことが、先生が亡くなる経緯などを振り返ると、今にして思われるのです。

ある日、お供して帰る途中、こんなこともあります。先生が「オイ！工藤君、『強きはなつかしからず』という言葉をしっているか」と私に聞くのです。「いつも正論をはいて、自説を曲げることなく、人に弱みを見せない。そういう人には、離れ離れになってから久しぶりに会っても、懐かしいという感情がわからないものだ」という程の意味だろうと思うのですが、そう聞かれたとき、「ボクのことを言っているのだな」と思わずにはいられなかったことを、今も、昨日のように思い出されて、恥ずかしくなります。次に、ABK建設の頃の話に移りましょう。

穂積先生と私（左）



■建設秘話—新中国との留学生交流

ABKの建設には、幾つかの要因が働いたのですが、その中で、実現の時には表に現れなかつた重要な要因がありました。実は、それは、皆様のお国、革命を経て生まれた新中国から留学生を受け入れるのに備えることでした。

穂積先生は、敗戦後10年を経た1955年から数年間、知人の要請で日中友好協会の常務理事に就いて学生青年対策委員会を担当していました。

穂積先生は、敗戦した日本が、新中国から留学生を迎えることの歴史的重要性、政治的意味を考えて、宿舎を用意することにし、それをABK建設の軸にするつもりだったのです。

実際、1958年中国赤十字会代表団の訪問に加わっていた中日友好協会関係者の廖承志、趙安博、肖向前各氏を直接訪ねた際、中国留学生の来日のために、「会館を建てて、準備してお待ちします。」と伝えていました。

しかし、これは直線的には進みませんでした。当時、日中国交回復の気運が高

まり、実現は間近かと思われたのですが、これを妨害する日本的一部の勢力が、長崎で、中国国旗を侮辱する事件を引き起こしたのです。その結果、日中関係の進展は全面的に凍結され、留学生の来日も望めないものとなったのです。

ABKの建設は、新中国からの留学生受入れを軸にしていましたが、全般的には、アジアをはじめとする発展途上国の留学生を対象に構想されていましたから、計画はその後も進められました。

そして、日中関係の後退によって、会館建設

に対する一つのインパクトが薄れかけたその時、思いがけず、関係者を通じて日本政府通産省から、建設予定の留学生会館に、技術研修生も一緒に入れて欲しいという要請があったのです。穂積先生は、人事権（役所から天下りをやらない）と会館の運営方針の一任を条件に、「アジア等の発展途上国の技術者を養成するものであれば」ということで、引き受けることにしたのです。

こうして、ABKは1960年6月、新中国からの留学生を欠いたままスタートしました。

敗戦後の日本が、新中国から留学生を正式に迎えたのは、1978年の「日中平和友好条約」締結の翌年、1979年春からですから、それから20年も待たなければならなかったわけです。今年は丁度、日中平和友好条約締結30周年ですね。

穂積先生は、最初の中国留学生を迎えた1979年の春、それまでの「留学生は1ヶ国2名以内」というABKの設立以来の規則を曲げて、18名を受入れました。ABK本館だけでは部屋数が足りなかったので、近くにあった職員寮も空けて、お迎えしたのです。又、翌年春には、新たに留学生を迎える部屋がABKにはもう無かったので、大森という所に、ある会社の社員寮だった施設を借りて、定員50名の宿舎を用意しました。「大森寮」です。そして、各大学を含めた留学生



技術研修生

受入れの態勢を整える目的で「日中留学生交流協会」（中留協）を立ち上げるために、東大はじめ関西の京大や阪大までも足を運び、かけ回りました。

新中国からの留学生を待ちに待っていた穂積先生の気持ちが伝わってくる動きでした。しかし、その動きの最中の1981年夏、穂積先生は、急逝し、中留協も宙に浮いたままとなりました。

本日は、この会場に、その当時留学された方々と、留学生フォローを担当された当時の大使館の方もお見えになっています。感激と感謝に耐えません。

また、1990年4月から2002年3月まで12年間、ABKは、東京都から委託を受けて、東京都が北京市との友好都市事業として建設した中国留学生の寮「東京都太田記念館」を運営しましたが、その時生活を共にしたOB、OGの方もお出でくださいました。

本当に有難いことで、心から感謝申し上げます。

公益事業を民間が行うこと

■ 穂積先生との出会い

〈表-1〉をご覧ください。これは、敗戦後の日本が再び留学生を受入れ始めた初期の頃の留学生の動きを追ったものです。

〈表-1〉 戦後初期の留学生受け入れ小史（敗戦～1960年代）

年	留学生	制度等
1945(S 20)		(敗戦)
1954(S 29)		国費留学生制度発足、学部の予備教育1年制（東京外大）
1955(S 30)	国費生給費値上げで同盟休校	
1957(S 32)		4月 財団法人日本国際教育協会設立 （9月財団法人アジア学生文化協会設立） 11月 駒場留学生会館竣工
1960(S 35)		4月 国費生学部予備教育3年制に（千葉大及び東外大） インドネシア賠償留学生制度 （6月アジア文化会館竣工）
1961(S 36)	2月 千葉大で留学生スト 12月 「中央公論」誌上で留学生、文部省を訴える	6月 千葉大留学生寮竣工
1962(S 37)	5月 千葉大で留学生スト	
1963(S 38)	3月 国際学友会で、食費値上げ反対の留学生ボイコット	8月 東京YWCA留学生母親運動発足
1964(S 39)	5月 千葉大学で女子寮めぐる授業ボイコット 9月 チュア君事件（マラヤ・千葉大）	（6月 ア文協在京留学生懇親会開催） 7月 文部省留学生課設置 （9月 留学生問題改善懇談会発足）
1965(S 40)	2月 ベトナム留学生北爆反対デモ	（3月 四会館運営懇談会発足）
1966(S 41)	インドネシア留学生蒸発事件（早大） チェン君強制送還（マレーシア・農工大）	
1967(S 42)	ブー君事件（ベトナム・東大）	（7月 留学生問題改善懇談会第4回会合留学生の身分保障をとり上げる。）
1968(S 43)	1月 国費生、給費値上げを文部省に要請	6月 JAFSA結成
1969(S 44)	「ベ平統」事件（ベトナム・24名、東大・東工大他）	
1970(S 45)	劉彩品さん事件（中国・台湾、東大）	国費生予備教育再び1年制に（東外大）

（『アジア留学生と日本』水井道雄、原芳男、田中宏 NHKブックス186.等に依りながら筆者作成）

1964年の中頃を境に、留学生の動きに、劇的と言える程の、質的变化が見てとれるでしょう。これには、右欄の7月にある「文部省留学生課設置」とあるのとは関係なく、実は、60年にABKの建設を果たした穂積先生やABKの存在が、深く作用しているのです。

年表右側の欄の1964年6月に〈ア文協在京留学生懇親会開催〉とあり、9月には、〈留学生問題改善懇談会発足〉とあります。「ア文協」とは、私たちの財団法人「アジア学生文化協会」の略称で、これらの活動は、いずれも穂積先生によって主導されたものです。

これまで、ストやボイコットなど実力行使に訴えるしかなかった留学生たちの間に、やっと、問題の話し合い解決に期待する状況が拡がっていったのです。

ちょうどその頃から、アジアに政治的再編が起こりました。即ち、1963年のマラヤからマレーシア連邦への再編、1965年のアメリカのベトナム戦争、インドネシアのスカルノからスハルトへの政変、そして、1971年の国連における中国の代表権の交代へと続く動きです。



チュア君事件

A black and white photograph showing a woman sitting at a desk, holding a baby in one arm and a young boy in front of her. They appear to be in a study or library, with bookshelves visible in the background.

劉彩品さん事件

母国におけるこれら政治変動が、留学生の上にも影を落したのが、1964年中頃以後の留学生「事件」として現れたものでした。

ちょうど、この転換の年の1964年春、私は友人の誘いで、新星学寮に入り、初めて、穂積先生にめぐり合ったのです。

そして、その後の一連の留学生の日本在留問題、即ち、年表にある「チュア（Cheah Soo Lin）君事件」、「ブー（Vu Tat Thang）君事件」「ベ平統事件」「劉彩品さん事件」にかかわったのです。

振り返ってみると、これらの事件は、ABKと私たちの取組みがなかったら、このような形で、日本社会に現れることも無かったように思われるものです。

■ アジアの留学生とめぐり合って

穂積先生の寮に入寮したのは、私が東京大学の3年生になる4月で、キャンパスが変わった時です。専攻は電気工学でした。その後、大学院の修士課程まで学びましたから、「チュア君事件」と「ブー君事件」は学生時代に取組んだものです。

例えば、「ブー君事件」は、ベトナム留学生が東京で行ったデモが発端でした。つまり、1965年2月、アメリカがベトナム北部に爆撃を始めましたが、そのわずか6日後に、当時日本で学んでいたベトナム留学生約200名が、日本各地から東京に集まって、「同じベトナム人を殺さないで」というスローガンを掲げて、日本政府機関の集中している霞が関の大通りを、デモ行進したのです。デモを組織したのは、当時の在日ベトナム留学生会の会長で、穂積先生の寮に、私と同期に入寮した東大の留学生でした。



ベトナム留学生のデモ



街頭署名運動

そして、その直後、デモに参加していた一人の学生ブーさんが、日本にある当時の南ベトナム大使館から、パスポートの延長が認められなかったのです。それで、そういう状況の下で、果たして日本在留はどうなるかが問われたのです。日本留学が認められずに、ベトナムに帰されれば、処刑は間違いないと思われたからです。

それが新聞に出て、早くも4日後に、広島の学生代表が2000名の助命嘆願の署名を集めて上京しました。デモの組織者が寮生でしたから、私たち寮生が、広間に、その学生代表を迎えたのですが、その代表は「広島へ戻って、1万名を目標に署名運動を続ける」と挨拶したのです。

それを聞いた私は、迂闊にも「広島で1万名なら、東京の僕たちは、10万名は集めないとなあ」と口をすべらせたのです。すると、それまで、広間の隅っこで黙って、習慣のトランプめくりをしていた穂積先生が、すかさず口をはさん

んで、「工藤君、今10万名と言いましたね。一度口に出した以上は、10万名に1名欠けても(不足しても)いけませんよ！」と畳み掛けたのです。

私は覚悟を決めました。そして、それ以前に「チュア君事件」の支援運動を経験していた寮生たちで、「ブーさんを守る会」を結成し、日本全国に署名運動を展開して、10万名を集めました。

その時、私は、田舎の両親、職に就いていた二人の兄と当時高校生と中学生だった二人の妹、小学校以来の同級生、そして全ゆる知人・友人に、署名集めを手伝ってもらうお願いをしました。

そして、東大に学んでいたブーさんは、当時、東大総長だった大河内一男先生が法務大臣に在留許可を要請して下さったことで、特別に日本在留が認められて、無事を得ることができたのでした。

私は、「チュア君事件」や「ブー君事件」を通して、アジアの留学生たちと友人になり、色々学ぶことがありました。特に、大きかった一つは、アジアの留学生から、日本人とは異なる、自立した人間がどんなものかを教えられたことです。もう一つは、近代日本がアジアで歩んだ「歴史」を、アジア人の目から見ることができたことです。

私は、ブーさん事件が解決して迎えた春、大学院を出て、ABKの仕事に入りました。1968年4月です。今からちょうど40年前ですね。専攻の電子工学の道を歩むより、「アジアと共に生きる日本」をつくる方に関心が移っていたからです。

■忘れがたい部屋

次に、私がかかわったもう一つの例を紹介して、ABK的活動スタイルを覗いてもらいましょう。

それは、もう10年以上も前になるでしょう。ある春の日の夕方、偶々、ABK

**ブーさんを守る会会長
(アサヒグラフ)**



「ブーさんの問題（南ベトナム）留学生ブー・タト・タンさんに昨年、本国から帰国命令がきたが、本人には帰る意志がなく、今春守

る会が生れた」は本来は「ベトナムの方の問題でした。ですから私達の会ができる前からベトナム留学生会が努力を重ねています。

に居残っていて、私は一人の留学生の訪問を受けました。5時をとっくに回っていて、彼はすっかり疲れ切きて、声も絶え絶えといった感じでした。

聞いてみると、「大学院を東京大学でやることになり、部屋を探しに名古屋から上京したのですが、1週間にもなるのにいまだ貸してもらえない、明日は名古屋へ帰って、留学をあきらめて、帰国するかどうか考えたい」と言うのでした。誰かがアジア文化会館（ABK）を訪ねてみたらと言ってくれたのだそうです。

国費留学生（日本政府文部科学省奨学生）だった彼は、大学院進学を境に私費に変わり、住まいを

自分で探すことになったのですが、こんなハメになるとは夢にも思わず、東京見物気分半々にバイクを飛ばしての上京でした。

私としても、「空きはないね」と応えるしかなかったのですが、せっかくABKを訪ねてきた目の前の好青年にそれだけの返事ではいかにも無念と、私は腕組みをして思いを巡らしました。

しばらくして、都心からさほど遠くない所で農園を営んでいる先輩が思い浮かびました。敗戦前の穂積先生の門弟で、先生と一緒に活動していた人です。ダイヤルを回して、「本人さえよければ」という返事をもらうと、切り出しました。「もう学期が始まるんだったら上京するしかない。定住先を探すまで知人の農園の作業小屋へでも行こうか」と。

本人は、それでいいと言うのですが、ともかく、彼に見てもらう必要があったのと、彼を先輩に引き合せる必要もあったので、連れ立って知人宅を目指しました。冷たい雨が降り出していました。

知人宅に着いたのは夜9時を回っていました。私は以前訪ねたことがあって、繁忙期に手伝い人が仮宿にする狭いながらも小さっぱりしたものであることを知っていたのですが、暗闇の農園に着くとやはり気おくれしないわけにはゆきませんでした。でも彼の方はと言うと、「地獄に仮」と胸を撫で下ろし、上京の支度をするため、その夜のうちにバイクを名古屋へと走らせたのでした。

私は、あくまで、定住先を探すまでの仮の部屋のつもりだったのですが、彼は、大学院を終わって帰国するまで、ずっとそこに住んでいたそうです。後で、先輩から聞きました。先輩が、好意をもって、その留学生を家族の一員として遇してくれたことによるものでした。

留学生に紹介する部屋としては、私のしたことは、失礼千万なことでしたが、

お蔭様で、私も救われました。それで、皆さんにも、こんな風にお話しする気になりました。

■民間人が何故やるのか

公益事業の担い手は、ボランティアと関連づけて考えられることが多いようですが、全てボランティア精神の持主とは限りません。但し、ここで、ボランティアとは、「雇用関係に依らない自由意思で課題を作つて、それをこなす人」という程度の意味で使っています。

政府系の場合は、大半が雇用に基づく、職制と給料で働く官僚であつて、ボランティアとは、対局にある存在と言えます。一般に、政府系では、ボランティア的に動くことは、抑制され、官僚的行動様式しか許されない性格が強いのです。(それによって、継続性と公平性が保たれている面があります。)

では、純民間はどうか。一口で言って、多様です。無給の担い手もいますし、有給の者もいます。因みに、私は有給です。そして、有給の中には、官僚と変わらない者もいれば、初めはそうでなかったのに、年数と共にそうなった人もいます。

だからと言って、有給だから、官僚的だとは言えません。ボランティア精神を保っている担い手も少なからずいるのです。純民間の事業体は、財政事情が厳しいこともあって、多分に、ボランティア的活動に依存せざるを得ない事情にあるし、それを良しとする雰囲気もあります。

それでは、経済的利益を目指さない公益事業に、民間人が取り組むのは、何故でしょうか。

私の知り合いの先輩に、長く企業の経営をやっていて、定年後、「もうけるのはもういい。世の中の役に立つことをやりたい」と言って、私財を投げ打って、アジアの留学生に奨学金を上げる財團を創った人があります。

又、女性で、それも奨学財團に勤めていた方ですが、身分の安定が保証されているのにそこを辞めて、アジアの留学生と交流するボランティア団体を立ち上げ、小口の寄付金を集めながら、無給で活動を続けている人もいます。

それから、日本がバブル経済で湧き返っていた頃、有名な某保険会社の課長をやっていて、多くの部下を従え高給をとつて絶頂期にあった人が、突然辞めて、国際協力の仕事をしたいと相談に見えたこともあります。

いずれも、経済的利益を捨てている点で共通していますが、それでは、何故経済的利益の得られない公益事業に取り込むのかというと、必ずしも同じとは言えないように思います。

一説に、ボランティアといえども、報酬を期待してやっているのだという論があります。ここに言う、報酬は、経済的報酬とは異なる、もっと広い意味のものです。つまり、自分で選んだ価値を追求することによって、自分の中に穴が空くようになり、そこに、ボランティア活動をすることを通して、他人から流れ込んでくるものが報酬で、金銭で計れない、思いがけない「他人とのつながり」とか「情報」であったりするというのです。

現実にも、ボランティアをやった時間に応じて、金銭でなく、「時間貯蓄」ができる、必要な時、それを使って、自分もボランティアからサービスを受けられる仕組み等もできているようです。

しかし、この説は、私にはしっくりきません。何か、自分で定めた課題を追求しているうちに、自分に穴が空くというのは、その通りのように思いますが、その穴を埋めるものが、他人からもらう報酬に限る点は、違うように思うのです。

今年、ミャンマーの留学生たちが、5月初めに母国を襲った大水害の復興支援のため、街頭募金に立ちました。私も加えてもらったのですが、寄付をしてくれた人には、こちらの呼びかけに応えてとか、目と目が合って訴えかけられたからとかで、応じてくれた人は全然いませんでした。

そうではなくて、そこで何が行われているかを知るだけで、どこからともなく現れて、勝手に募金箱にお金を入れると、こちらのお礼したい気持ちにお構いなく立ち去っていく人が普通でした。

その時、私は思ったのです。「彼らにも、穴が空いているのだなあ。でも、それを埋めるのは、他人から貰う何かではなくて、それこそ、寄付するという自分自身の行動だ」と。つまり、他人から貰う報酬ではなく、自分で穴を埋めているのです。

他人から貰うもので満たされてボランティアを続けている人や場合もあるでしょうが、自分の実践以外では埋めようもないという穴が空いている人や場合もあるに違いありません。

公益事業に、民間人が何故取り組むのかについても、自ら課題を掲げたことで、即ち、何らかの理想を描いて志を立てたことで、自分の中に空いた穴を、自分の実践以外では埋めようもないということで、そういう人や場合があるように思います。むしろ、それが、中心にあるのではないでしょうか。

そこまで考えないと、無給でもボランティア精神を失っていく人がいたり、有給でもボランティア精神を失わない扱い手がいるという不思議の解明には、到達できないのではないかでしょうか。

おわりに

最後に、40余年間、アジアの留学生と交わって来て、私が感じているこの間の変化と、今日の日本について、若干ふれて終わりにしたいと思います。

■自由にものが言えない

私が、今一番気がかりなことは、今日の日本では、留学生が、自由にものが言えないような雰囲気が拡がり、強まっているということです。

敗戦後の日本が留学生受入れを始めた頃は、戦争の疲弊を残した中でのことで、宿舎等全ゆる面で不備だったため、当時の留学生は、大変な苦労を味わわなければなりませんでした。

しかし、そのような中でも、ものは自由に言えたし、通じなければ、ストやボイコットの実力行使で訴えることもできたのです。それは、先程見てもらった年表でも分かるとおりです。そして、内容的には、やむにやまれぬ切実な心情によるもので、敗戦国日本の弱みに付け込んでというものは、決してなかったのです。

その時と比べれば、今日の留学生受入れ態勢は、制度面でも、留学生と交流する人の数でも、格段に改善され、拡充されました。それでは、その時と比べて、自由にものが言え、相互理解が深まっているかと言えば、ちがうように感じるのです。

ありきたりの流行などの話題では、話がはずんでいるように見えますが、国や民族の立場がからむテーマとか、心の中の本当の気持ちとかになると、留学生が日本人、日本社会の論調に「敢えて物申す」というのは、まわりの雰囲気から、とてもシンドイようなのです。

つまり、今の日本には、アジアから見た意見を自由に言うことを許さない固さがあって、留学生は、皆、できるだけイジメにあわないように、目立たないように、身をひそめているという感じです。

敗戦直後は、日本人の誰もが、「アジアと共に生きる日本にならなければ」と誓い合ったのですが、60年代の高度経済成長で足を踏み外し、更に80年代のバブル経済と円高で、思考が一層内向きになり、相手を思い回る謙虚さを失って、日本人の多くが、頑に自己主張をはじめたという感が強くします。私は、日本の孤立化を心配しないではいられません。

■留学生30万人計画

留学生に関する重要な動きも、一つ伝えておきましょう。

今年の夏、日本政府は、留学生を、2020年までに、30万人にするという計画を発表しました。現在の留学生数は、12万人弱ですから、わずか12年間で、ほぼ3倍に、20万人も増やすというものです。

実は、日本は、1980年代にも、当時1万名ほどだった留学生を、21世紀初頭頃までに10万名にするという方針を打ち出したことがあります。その結果、今日の留学生数が、約12万人になっているわけです。(図1 参照)

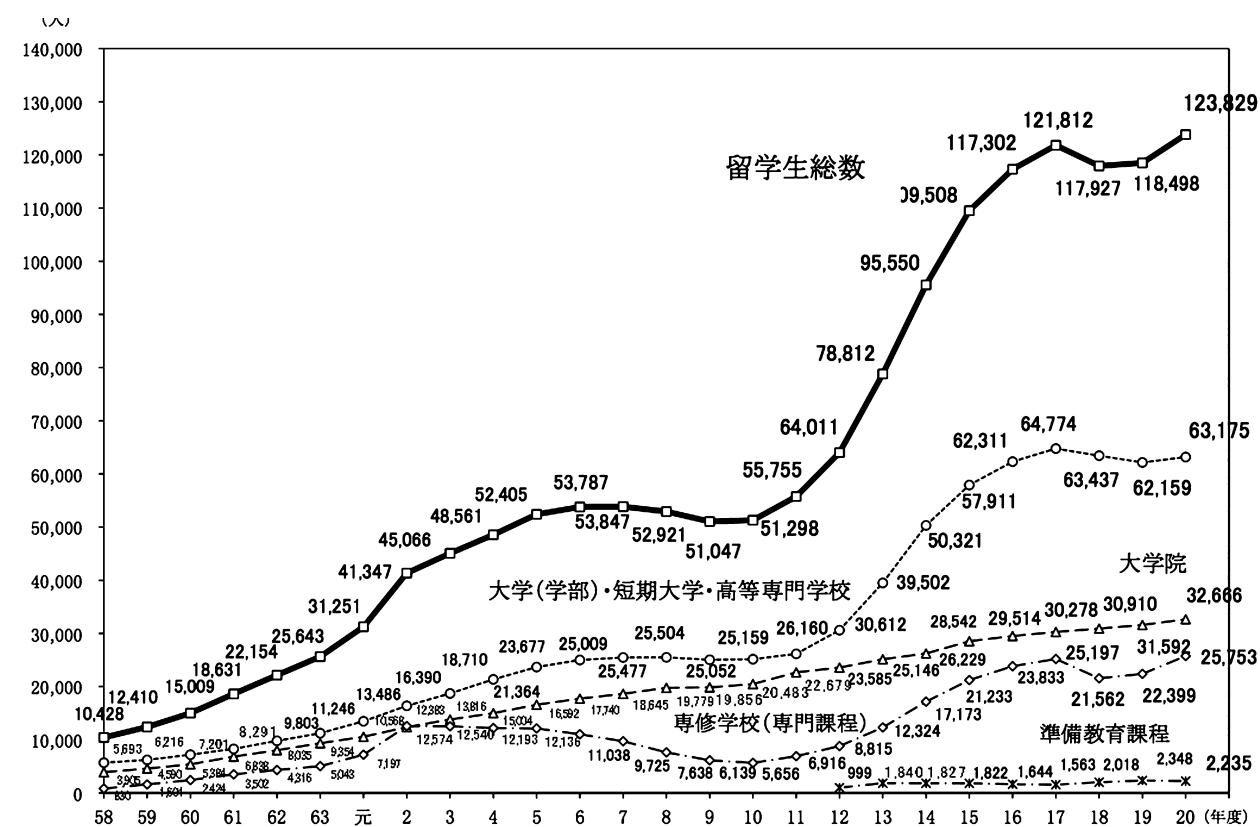
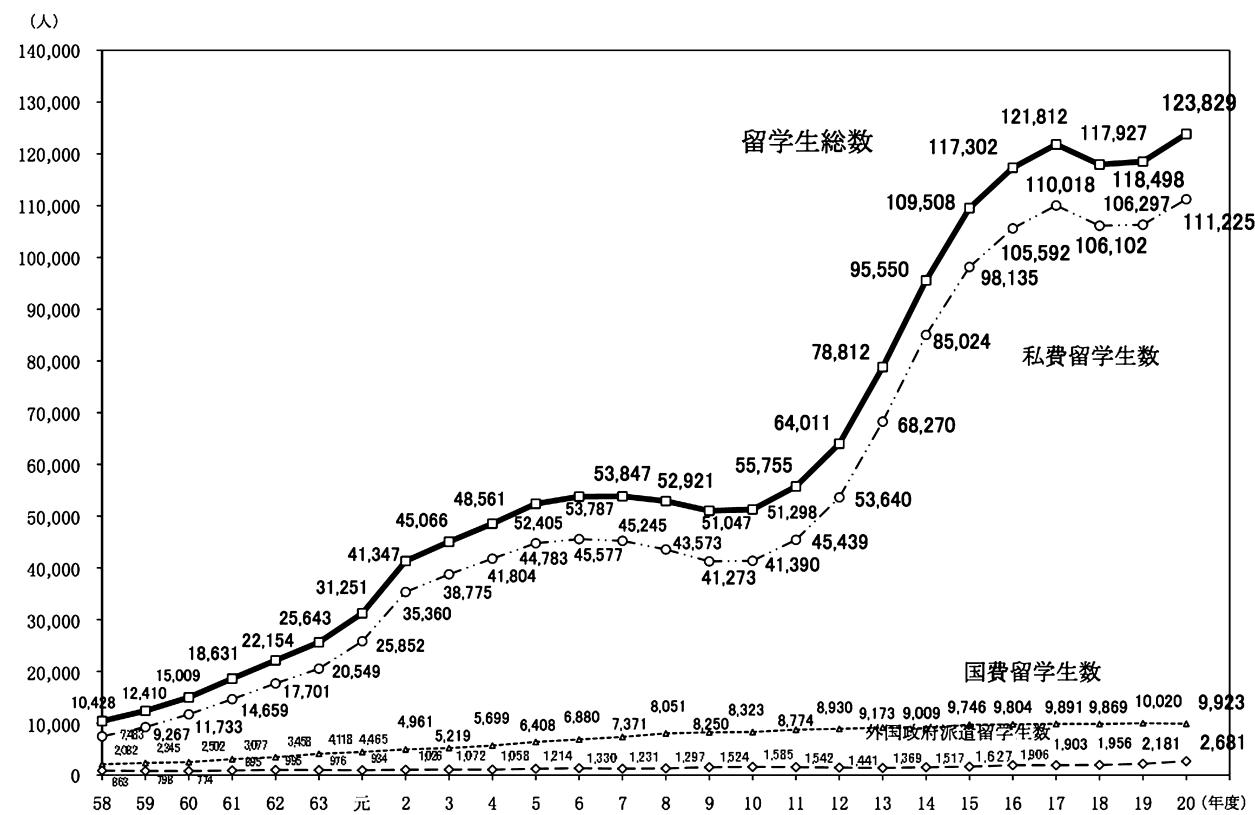
それでは、何故、留学生数拡大の方針を打ち出すのでしょうか。理由は、'80年代の時と今日では、異なっています。

'80年代の時は国際的に、日本も経済力に見合った人材育成を引受けていることで、外交力アップにつなげようとする政治的思惑によるものでした。

そして、それは、日本人の18歳人口が減少に転じ、大学の収容力に空きが生ずることで現実味をもったのです。

他方、今日の「留学生30万人計画」では、「海外の優秀な人材の大学院や企業の受入れを拡大する」とうたっていることからも、日本人の少子化で、研究や経済活動の人材が不足するのを外国人で補おうという、社会経済的思惑から出てい

図1 留学生数の推移 出典JASSO（平成20年）



ることは、明らかです。

実際にも、色々な形で、留学生の日本企業への就職を促進する企画が進行していますし、日本語教育でも、「ビジネス日本語」を教育する流れが生まれています。

また、留学生が日本企業に就職し易くする誘導策は、「高度技術を求めるアジア諸国そのためのものである」というプロパガンダまで、盛んに唱えられています。

あたかも、公益事業を始める財団法人が予め資金を用意しなければならないことから、資金蓄積をはかる企業活動は、公益活動であると言わんばかりです。資金蓄積が、公益活動に必然的に結びつくわけではないのに。

私は、この日本の政策に、留学生やアジア各国がどのように反応するかは、日本側の関与外のことですから評価はしません。

一方、『留学生30万人計画』には、「日本語教育の充実」や、「帰国留学生の同窓会の組織化支援」も入っていて、具体策では、ABKの将来を開く具体策と広範囲に重なるところから、私たちの仲間の中にも ABK の発展に有利な状況が開かれるとして歓迎する向きもあります。

しかし、ABKの留学生交流促進の理念は、日本及びアジア諸国の社会に柔軟性を創り、平和な環境を保とうとするものであるのに対して、「留学生30万人計画」のそれは、日本社会と経済の維持・継続のためのものです。

今回の「留学生30万人計画」は、留学生受入れを、日本社会の維持、継続の目的の下に、具体的に組入れた最初の意志表示となりました。これは、日本が、歴史的にターニングポイントにさしかかっていることを印象づけるものです。

「アメリカは、とっくにそうなっているよ。大げさに騒ぐ程のことでもないんじゃないの」と言われそうですが、アメリカは、皆さんご存知のとおり、留学生でも外国人誰でも、国の構成員、即ち、家族の一員にしてしまう国柄です。果たして、日本はどうするのでしょうか。

私はどうかと言えば、「留学生30万人計画」には、幾つかの視点から警戒的です。その一つは、この政策の根底に、「満州移民の逆バージョン」、即ち、「労働力過剰時代の満州移民。労働力不足時代の30万人計画」の臭いを嗅ぎ取るからです。身勝手過ぎてはいけません。ツケが戻ってきた時、あわてますから。

■新しい研究姿勢

しかし、そう考えるにしても、私は、日本が、敗戦前と同じことをするとは思っていません。敗戦後、アメリカの支配下に、日本の社会は大改革されました。

アメリカによるものへの反発もあって、国粹的な勢力の一部には、敗戦前の日本に戻そうとする動きもありますが、改革の中身には元に戻ることのあり得ない改革もありましたから、今日の日本を、直ぐ敗戦前の日本で置き換えるようには安易すぎると思います。今日の日本そのものを、地道に研究する必要があると思うのです。

それは、日本人の中国観についても言えることです。改革開放で改革された現代中国そのものを研究するのでなければ、又、それに不満があるからといって、そっくり改革前の中国になるというのでは、皆さんも、きっと納得されないし、皆さんから笑われてしまうでしょう。

私は、今日おいで下さった皆さんに、新しい姿勢で、日本研究及び中国研究を大いに進めましょうと、呼びかけたいと思います。

もし、皆さんから、具体的提案があれば、私はABKが現在進めている改革に文化交流の一環として、具体的に組入れることを真剣に検討する用意があると申し上げたいと思います。

以上で、私のお話を終わります。

長い間のご清聴、誠に有難うございました。

(おわり)

あとがき

第3回 SGRA チャイナ・フォーラム報告

一燈やがて万燈となる如く

—アジアの留学生と生活を共にした協会の50年—

今西淳子

中国における第3回目のフォーラムは、9月26日（金）に延辺大学総合棟七階報告庁にて、9月28日（日）に北京大学外国语学院民主楼にて開催されました。2006年に北京大学で開催したパネルディスカッション「若者の未来と日本語」、2007年に北京大学と新疆大学で開催した緑の地球ネットワーク高見邦夫事務局長の講演「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」に引き続き第3回目です。今回は、50年にわたり東京で留学生の受け入れ態勢の改善に取り組んできたアジア学生文化協会の工藤正司常務理事に、協会の創設者穂積五一氏の思想とアジア学生文化協会を通して見た日本とアジアのつながり、そして民間人による活動の意義をお話しいただきました。

工藤さんは、「お国の発展ぶりに讃辞を送ることからお話を始めることになるのですが、私の本当の心を申しますと、それよりも前に、私の国・日本が過去に皆様のお国に行なったことをお詫びさせていただきたい思いです」、「今日私がお話するのも、私たちの協会や創設者などを、誇るためでも、宣伝するためでもありません。敗戦した国で日本人は何を考え、どのように行動したか、そして、現在はどう動いているかを、一つの例として、私たちの協会とその創設者の人間を通してのぞいてみること、そして、それを通じて『公益事業を民間が行うこと』の意味を皆さんと一緒に考えてみて、もし、皆様にも参考になるがあれば、活用していただきたいということです」と講演を始め、戦前の日本に対する反省に立って「新しい戦後日本」を構想して設立されたアジア学生文化協会と創設者穂積五一氏の思想、その後の協会の展開と工藤さんご自身の関わりを、パワーポイントで写真を写しながら話されました。そして、最後に、「日本に居る留学生たちは、今、いじめにあうのを恐れて、自由にものを言えないのではないか」「移民政策が定かでないのに、日本の労働力不足を補うために留学生の受け入れを急増させようという留学生30万人計画は危ないのでないか」「日本も中国も短絡的に相手を見ることが多すぎるのではないか。お互いの現在の状況を新しい姿勢で、もっとよく研究する必要があるのでないか」と問題提起され、「具体的提案があれば、私はABKが現在進めている改革に、文化交流の一環として、組入れることを真剣に検討する用意があると申し上げたいと思います」と結ばれました。

演講人：工藤正司



延辺大学フォーラムの参加者は、主に国際政治学を専攻する学生約150名で、日本と中国の教育や学生の違いについて等の質問がありました。また、北京大学フォーラムの参加者は、日本語学習者を中心とした北京大学、北京第二外語大学、北京语言大学、北京人民大学等の学生、日本留学中にアジア文化会館や太田記念館に滞在した方々、渥美財団の渥美理事長他関係者など約80名でしたが、大学で日本語を勉強する学生さんは皆さんとても流暢な日本語で質問したので驚きました。二つのフォーラムを実現してくださった、延辺大学の金香海さん、北京大学の孫建軍さんに心から感謝いたします。また、参加してくださったSGRA会員のみなさん、呉東鎬さん、金熙さん、張紹敏さん、朴貞姫さん、馮凱さん、宋剛さん、ありがとうございました。

■ 延辺大学の金香海さんより

延辺大学のフォーラムでは、工藤さんの講演を熱心に聞きました。講演の後も、学生達の興味深い質問に対し、工藤さんは熱心に回答してくださいり、会場は一貫して熱い雰囲気でした。その余蘊が去らず、30名の参加者達は、日本国際交流基金の援助で出来たばかりの「延辺大学日中ふれ合いの場」で立食パーティーを開き、ワインを交えながら、再び工藤さんから日中学生気質の違いや日本語教育についてのお話を伺い、夜が過ぎるのを忘れました。このように大きな共鳴を引き起こしたのは、やはり工藤さんの講演の内容とそのすばらしい人格のためであったと思います。

日本とアジアは長い文明交流の歴史がありました。日本は明治維新を通じて西洋と肩を並べる近代国民国家になりましたが、その過程でアジアを否定して西洋の価値観を取り入れて“空想的帝国”をつくろうとしたが失敗しました。この後、またアメリカの価値観を取り入れ、先進国になったけれども、ここにはいろいろな価値観の歪みがあります。これがまさに日本社会の疾病であり、現在の日本の学生の思想行動にも表れています。これは、30年以上もアジアの留学生を支援してきた工藤さんが、日本の学生との比較から見出したもので、日本再生、そしてアジアの価値の回復と創造は、学生達の草の根の交流があつて初めて、

“一燈やがて万燈となる如く” 実現できると仰いました。大変優しく、すばらしい人格の持ち主で、文明に対する深い理解を持っていらっしゃる工藤さんを、私は非常に尊敬しています。

■ 北京大学の孫建軍さんより

「留学」について深く考えさせられるお話をしました。外国の進んだ技術や裕福な生活に憧れ、または外国語の習得や学術研究に役立たせるために、留学したい人が多いものです。多くの人の場合、それは夢だけに終わってしまいます。僅かながら留学を実現させた人もいます。自分を中心として生活を考える留学生と違い、工藤さんのいらっしゃるABKは留学環境を整えるために50年奮闘して来られました。日本国内政治の動きや国際関係の変化に翻弄されながらも、留学生のためという信念を曲げることはありませんでした。ABKのような組織は、アジアの学生にとってどれだけ心強い存在でしょう。会場には、ABKに世話を受けた元中国人留学生がたくさん集まつたのもABKの強い求心力の表れに違いありません。

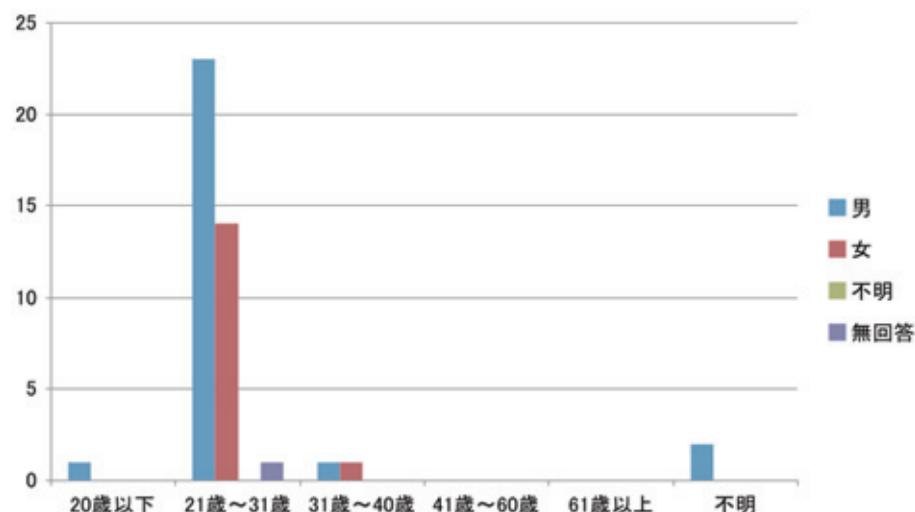
講演を聞きながら考えました。心にゆとりのある人でなければNPO活動は成立しません。留学がきっかけで、自分はNPOの存在を知り、関わるようになりました。精神的に豊かな方のそばにいるだけで励されます。もっと精神的に成長しなければならないと切実に感じました。

アンケート

■ 延辺大学

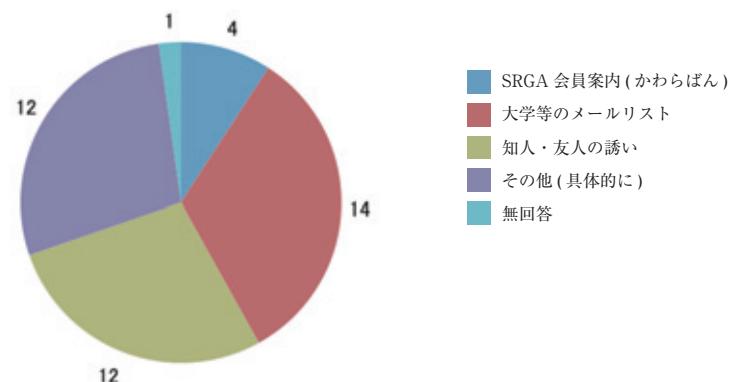
(0) あなたは

	20歳 以下	21歳～ 31歳	31歳～ 40歳	41歳～ 60歳	61歳 以上	不明	計
男	1	23	1	0	0	2	27
女	0	14	1	0	0	0	15
不明	0	0	0	0	0	0	0
無回答	0	1	0	0	0	0	1
計	1	38	2	0	0	2	43



(1) 今回のフォーラムを何でお知りになりましたか？

SRGA 会員案内 (かわらばん)	大学等の メールリスト	知人・友人の 誘い	その他 (具体的に)	無回答	計
4	14	12	12	1	43



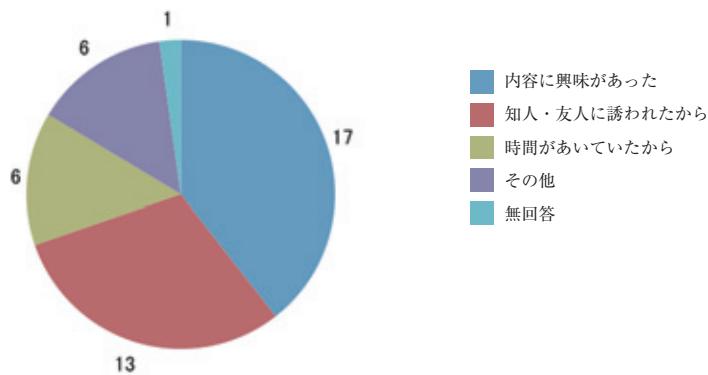
(2) あなたは、何故このフォーラムに参加しましたか？

内容に興味があった	知人・友人に誘われたから	時間があいていたから	その他	無回答	計
17	13	6	6	1	43

複数回答あり

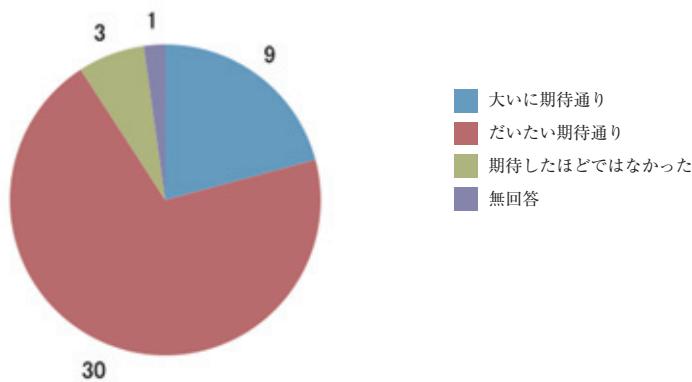
その他の記載

- 担任の先生が通訳をしていただきますから



(3) このフォーラムは期待通りでしたか？

大いに期待通り	だいたい期待通り	期待したほどではなかった	無回答	計
9	30	3	1	43



理由、コメント

- ・日本の戦争に対する態度を理解した
- ・日本についてよく分かりました
- ・よく理解できなかった
- ・よくわからない会議内容だった
- ・わからない
- ・多くの友人に会えました

- (4) SGRAでは、今後も中国の大学で、民間の公益活動を紹介するフォーラムを開催したいと思っています。あなたは、今後どんなテーマの話を聞きたいと思いますか？

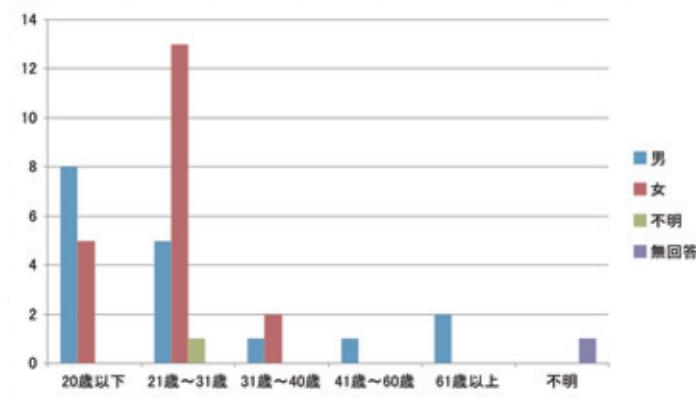
今後のテーマ、コメント

- 日中関係・日中文化比較 7
- 日本の風俗と文化 6
- 学術交流・留学 5
- 宗教 5
- 言語学・言語文化 4
- 日本の教育について 2
- 日本の先進技術と成功経験
- 思想文化、科学技術領域など
- 政治と経済
- 中日両国の言語の区別
- 日中韓朝文化の比較
- 哲学
- 歴史
- 日本の行楽産業と教育
- 文化差別
- 日本茶道についての内容
- 協力

■ 北京大学

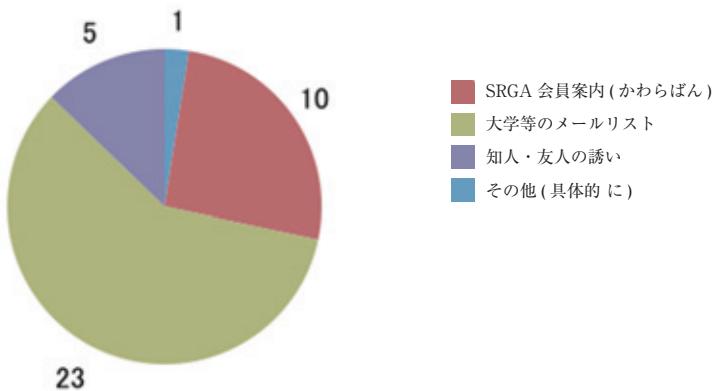
- (0) あなたは

	20歳以下	21歳～30歳	31歳～40歳	41歳～60歳	61歳以上	不明	計
男	8	5	1	1	2		17
女	5	13	2				20
不明		1					1
無回答						1	1
計	13	19	3	1	2	1	39



(1) 今回のフォーラムを何でお知りになりましたか？

SRGA 会員案内 (かわらばん)	大学等の メールリスト	知人・友人の 誘い	その他 (具体的に)	計
1	10	23	5	39



他の記載

- 年報通知
- ABK 同窓生 1979 年
- 北京大学外国語学部の BBS(電子掲示板)
- 学校からもらった講座ポスター

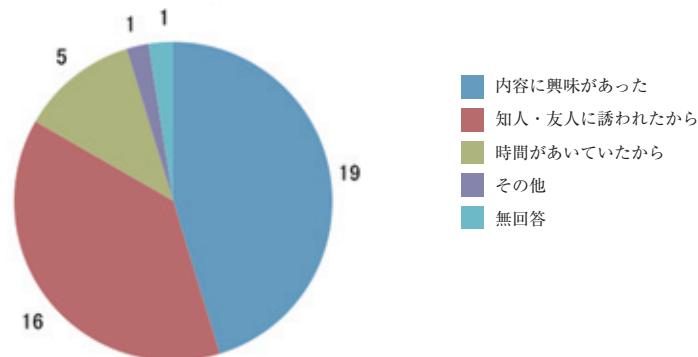
(2) あなたは、何故このフォーラムに参加しましたか？

内容に興味 があった	知人・友人に 誘われたから	時間があいて いたから	その他	無回答	計
19	16	5	1	1	42

複数回答あり

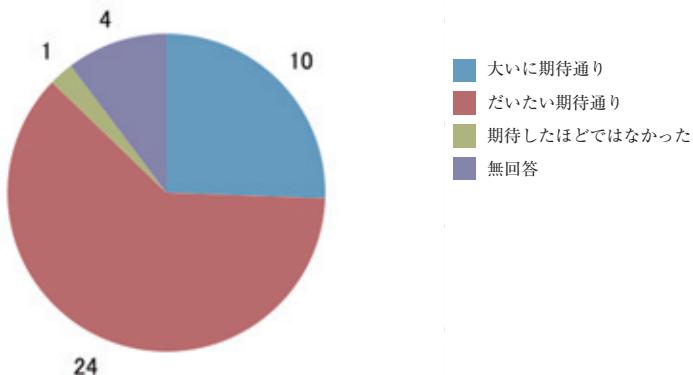
他の記載

- 担任の先生が通訳をしていただきますから



(3) このフォーラムは期待通りでしたか？

大いに期待通り	だいたい期待通り	期待したほどではなかった	無回答	計
10	24	1	4	39



理由、コメント

- 留学生活をいろいろ思い出されておもしろかったです
- 興味はありません
- 民間で公益活動を行うことの辛さを知りました。穂積先生に感謝の意を申し上げます
- 世界に対する日本人の見方や、日本の民間組織に関する情報、また日本留学の情報などをこのフォーラムで知りました
- 日本の留学生会館、民間の公益活動について紹介してもらいましたが、政策面の情報も知りたいです
- 今まで日本に行く留学生に対して言葉と生活の助けをSGRAが提供していくだけれどことを知りませんでした。中国国内ではほかにこのような組織あるかどうかちょっと知りたいです
- これまで知らなかった留学と留学生寮の情報を知りました
- 日本留学についてもっと知りたい

(4) SGRAでは、今後も中国の大学で、民間の公益活動を紹介するフォーラムを開催したいと思っています。あなたは、今後どんなテーマの話を聞きたいと思いますか？

今後のテーマ、コメント

- 日中関係
- 経済、環境、日本での就職
- 日本に留学したことのある学生自身による体験談

- ABK留学
- 学生寮、留学生会館、奨学金
- 修学旅行
- 奨学金、スポーツ
- 在日中国留学生はどのようにすれば留学生活を充実して送れるのですか
- 在日中国人留学生のサポートだけではなく、中国人学生との交流と相互理解を
- 環境保護
- 民間で行われた公益活動の仕組み及びその活動の文化的内容
- 日本の漫画産業はどうやって日本産業の柱になったのか、日本人の文化史観点はどうであるか、日本の文化所属感はどうなのか、について知りたいです
- 日本への留学と仕事に関する情報がほしいです
- 一定ではないです。各種の情報何でも知りたいです
- 在日留学生の実生活や、ABKのような公益団体をどう利用していいかについて知りたいです
- どうやって日中両国の人々がもっと互いに理解しあえるかについて知りたいです
- 日中共同研究に関する課題についてもっと紹介してほしいです
- 日本文化、交流活動
- 中日関係、日本文化
- 何でも知りたいです
- 日本の社会及び各種の伝統文化に関する話題
- 共同活動、留学情報、文化紹介
- 中日関係、留学
- 戦前及び戦後の日本思想史

第三届 SGRA 中国论坛

一灯燃亮万灯

协会与亚洲留学生共同走过的 50 年

■ 论坛的宗旨

本次论坛是继 2006 年在北京大学举办的公开座谈会“青年的未来与日语”，2007 年在北京大学和新疆大学分别举办的公开演讲“黄土高原绿化合作十五年：从不理解、失败到相互理解和信任”（演讲人：绿色地球联盟高见邦夫事务局长）之后的第三次 SGRA 论坛。由亚洲学生文化协会的常务理事工藤正司先生担任演讲人。工藤先生所在的亚洲学生文化协会成立 50 年来一直致力于改进和完善东京留学生的接收体制，工藤先生在演讲中将介绍他通过文化协会创建者穗积五一先生的思想以及协会的工作所看到的日本同亚洲的接触点，介绍民间组织活动的意义。会议提供中日同声传译。SGRA 今后也将继续在北京大学以及中国其他各大学举办各种介绍民间公益活动的论坛。

何为 SGRA?

SGRA 是以长期留学日本并在日本的大学获得博士学位的来自世界各国的研究人员为中心组建的，其研究宗旨在于为勇于挑战全球化的个人或组织制定方针和战略时提供有益的帮助，为解决问题建言献策，并将其研究成果以论坛、报告书、网页等形式，广泛公诸于社会。对于每个研究课题，都分别由多国籍跨学科跨领域的研究人员组成研究小组，凝聚多门科学智慧，构建跨领域网络，从多方面的数据入手，展开分析和考察。SGRA 不以特定的学科或某一群专家为对象，而是以整个社会为对象，展开领域广泛、跨学科、跨国界的研究活动。为培养优秀地球公民做出贡献乃是 SGRA 的基本目标。

一灯燃亮万灯

协会与亚洲留学生共同走过的50年

时间	2008年9月26日(星期五) 下午3点—6点	2008年9月28日(星期日) 下午2点—5点
会场	延边大学综合楼七階報告厅	北京大学外国语学院民主楼208会议室
主办	关口全球化研究会(SGRA)	
合作伙伴	(财)亚洲学生文化协会, 北京大学日本语言文化系, 延边大学亚洲研究中心	
赞助	(财)双日国际交流财团, 国际交流基金北京日本文化中心, (财)渥美国际交流奖学财团	

摘要

- 介绍亚洲学生文化协会及其创建者穗积五一的思想。该协会是在对战前日本的反省和对“战后新日本”的构想这一历史背景下成立的。
- 介绍这些年来协会开展的工作、演讲人自身的人生转折以及战后日本走过的历程。
- 介绍在回归「战前日本」的动向日益增强的今天，现代日本以及协会所面临的危机。
- 介绍民间组织活动的意义及今后的课题。

后记 今西淳子—— 64

一灯燃亮万灯

序文	43
亚洲文化会馆(ABK)和创建人理念组织、设施及事业	
财团法人	44
本财团是做什么的机构?	45
学生文化协会(SCA)的组成	45
ABK同窗会的发展	46
创办人	
战败前的穗积先生	47
逃离烦闷	48
战争中	49
日本面对战败	49
个人的魅力与品格	51
建设秘话—和新中国的留学生交流	53
由民间经营的公益事业	
与穗积先生的相遇	54
与亚洲留学生的相遇	55
难忘的房间	57
何以让民间人士承担	58
结尾	
没有言论自由	60
留学生30万人计划	60
新的研究态度	62

演讲人简历

■ 工藤正司 (Kudo Masashi)

1943年5月生于日本山形县。1968年3月，毕业于东京大学研究生院硕士课程(电子工学专业)。在学期间入住穗积五一先生的“新星学寮”，在与越南等亚洲各国的留学生的交流中了解到留学生所面临的各种问题，开始关注日本及亚洲各国之间存在的各种历史与社会问题，并从此改变了自己的人生道路。1968年就职于穗积先生创建的亚洲学生文化协会至今。

讲演

一灯燃亮万灯

协会与亚州留学生共同走过的50年

工藤正司（财团法人 亚洲学生文化协会 常务理事）



序文

我是主持人刚刚介绍过的工藤。首先，非常感谢大家在百忙之中抽出时间来听我的演讲。这次是我第二次访问中国，自1988年秋天首次访问已时隔20年。在这期间，贵国发生了人类历史上前所未有的，翻天覆地的巨大变化。不久以前，奥运会也成功地落下了帷幕。我怀着极大的兴趣来到了中国，想看看如今的中国社会和中国人有了怎样的变化。

我的演讲首先从赞美贵国的巨大发展开始。但在这里我更想说的是，请允许我，就我的祖国—日本过去对贵国所做的不可原谅的事深表歉意。非常抱歉而且深感遗憾的是，在苦难当中失去生命人们无法复生，我们能做的也只有去吊唁死难者来安慰其亡灵。

世界上存在着这样一种职业——就是我们的社会生活当中必不可少，但无任何回报，在民间似乎没有人愿意主动去做的职业。所谓公益事业就是指这样的职业，因此这样的职业只能由国家和地方自治体来做。国家和地方自治体是公益事业的典型代表，而且是其事业的最大承担者。然而，民间也有敢于挑战这种事业的人。

今天我演讲的题目是关于“由民间来经营公益事业”，主要以我现在工作的地方——亚洲文化会馆（简称ABK）为例。另外，要介绍ABK的创建人穗积五一先生，谈一下无经济效益的公益事业为何由民间团体来经营。理所当然，有人要追问我这样的问题：“那么，你是做什么的呢？”因此我打算把自身的经历也简要介绍一下。最后还要涉及本人对于当今日本一些问题的感触。

只是，事先我要先向大家进行说明的是，日本和中国存在着不同的国情，特别是政府对待公益活动的立场，态度以及政府和民间的关系的不同，对历史要负的责任也不同。因此，我希望大家在充分理解两国之间存在的不同国情的前提下，再来听我的演讲。对此我感到不胜荣幸。

亚洲文化会馆【ABK】和创办人理念

组织、设施及事业

■ 财团法人

我工作的地方叫做财团法人亚洲学生文化协会。ABK 是设施和建筑物的名称，建设经营

ABK 的组织是财团法人亚洲学生文化协会。

名字前的“财团法人”如同股份公司，是依据法律得到社会认可的。不同于任意成立的一个团体，它是可以签合同并充当保人的。但也不同于股份公司，它不能进行经济活动。

它是以开展有利于公共利益的活动为前提，被批准成立的机构。经济来源主要是提前准备资金，将这些资金中产生的利息作为经济收入充当活动经费。另外，在经济方面以免征税金等各种形式受到政府照顾。不仅是政府设立的机构，对已设立的机构，政府也会拿出补助金进行资助。当然也有与政府毫无关系的纯民间机构。我工作的协会就是由民间创办的无政府补助金的纯民间机构。正因为这样，日常开支总是很紧张。

ABK 概况



我们的协会名称里有“亚洲”二字，但其实里面还包含了亚洲、非洲和拉丁美洲的意思。也就是说，我们把亚洲作为所有受殖民地统治或曾是半殖民地国家，历经苦难与艰辛终于实现独立的发展中国家的代表。这一点还请大家理解。

关于这个财团法人的创立，有几个主要因素互为关联。其中之一是为了建立日本和中国之间的留学生交流制度。有关这一点，我想留到后面叙述。

■ 本财团是做什么的机构？

我们的财团是从社会层面，支援来自亚洲各国的留日青年学生。具体来讲，就是解决宿舍和奖学金等生活方面及签证等法律方面的问题，另外还致力于改变部分日本人对亚洲人的歧视意识等诸多问题。

那么，谈到为什么要支援留学生，无庸讳言，这是为了通过日本以及亚洲各国人民之间的交流，加深互相之间的理解，促进人与人之间的友好相处，为亚洲各国的独立与发展出一份力，进而为世界和平做出贡献。我们期待留学生在接受外国文化之后，能够为祖国的发展，乃至为亚洲地区的和平发展作出贡献，扩大亚洲各国共同合作的圈子，而且相信这种可能性极大，非常值得期待。

■ 学生文化协会（SCA）的组成

ABK于1960年6月成立事务所，原定从7月1日开始接收留学生入馆，可是面试一结束后学生们就按捺不住等不及了，所以从6月末开始就陆续地住了进来。留学生入住以后，举办的第一个活动是在7月初的某个星期天的早晨，入住学生（留学生，研修生，日本人学生）和职员们都聚在一起，成立了由学生和职员组成的名为“学生文化协会”（SCA）这样一个自治会。这样一个团体的成立，使ABK与当时以及后来陆续成立的其它留学生会馆大为不同。今天我

学生文化会（SCA）情况
(ASIA61)



能够站在这里给大家做演讲以及能够访问贵国，说到底也是托了“学生文化协会”的福。ABK 的运营成为民间运营公益事业的一个典范、一个起点。

SCA 的集会每月一次，在集会上不仅制订了运营 SCA 的章程，也制订了运营会馆的全部核心内容。比如，ABK 的定员是 110 名，其中技术研修生是 80 名，留学生是 30 名。30 名留学生的名额规定“一个国家 2 名以内”，夜间关门时间定为 12 点。还有冬季开暖气的时间为早晨几点到夜里几点，食堂的菜谱和价格等等都是在 SCA 的集会上决定的。

SCA 是入住学生和职员基于平等参加的自治会，大家对共同生活的规章制度方面提出各自的意见，制度定下来了自然会遵守，职员做好自己的工作，学生管理好自己的生活。这也是创建人穗积先生（在后面详细介绍）的希望，他希望大家在会馆一起生活能够本着一个“所有个人、所有民族的自主和平等”的原则。

这么做是希望会馆不是一个“事务所规定运营管理的规章制度，学生服从遵守”的场所，而是要把 ABK 变成一个发挥学生自主性的生活场所。所以不论国家人口的多少，为了使各国学生都能平等地生活，制订了这个“一个国家 2 名以内”的住宿制度。

■ ABK 同窗会的发展

在 ABK 的生活是非常美好的。在 ABK 生活过 4 年的学生回国后，OB、OG 之间自发地成立了“同窗会”。ABK 同窗会建立在具有自治性的共同生活的经验基础之上，以加深相互之间的友谊为基本宗旨。另外，成员回国以后，齐心协力发展自己的国家，而这也正是我们的最终目标。

创建人穗积先生对由回国留学生和研修生自发形成的组织“ABK 同窗会”

ABK 同窗会代表会议



寄予了很大的期望，希望青年人“自发的、为了自己国家及社会的发展而齐心协力”的理想，能够超越“ABK 同窗会”的圈子，传到亚洲、非洲、拉丁美洲等更多国家的人们的心中，并把自己这样的心愿形容成“一灯燃亮万灯”。一个人心中燃起的理想之火，一点一点不断地传到别人的心中，引起共鸣，就如同蜡烛一支一支地被点燃，瞬时点亮周围一样。理想之火毕竟是个人心中自发燃起的，要不要点燃取决于个人的主观意识。这是尊重个人自主性，以及期待个人自主性得到尊重的思想的体现。也可以说这是穗积先生“所有个人、所有民族的自主和平等”的思想及 ABK 理念的体现。因此，可以说 ABK 所取得的成就与 ABK 同窗会的作用是分不开的。我这样一个把今天演讲的题目定为“一灯燃亮万灯”，相信大家也能够理解了吧。



TPA（泰日经济技术振兴协会）



TNI（泰日工业大学）

比如，在泰国曼谷“反日运动”高涨时期，以同窗会为中心，展开了与日本政界、财政界人士的讨论，日本方面接受了泰国提出的“尊重泰国自主性的新的经济合作理念和方式”的提议，并创立了技术转让中心，为泰国民族企业的技术发展作出了贡献，使泰国民族企业有了很大的发展。此组织被称为 TPA（泰日经济技术振兴协会），在之后的 30 余年的不断努力下，TPA 不但有了独立的活动范围和资本积蓄，还创办了大学。大学名为泰日工业大学（TNI），是在未接受日本的资金援助下独立创建的学校。

创办人

■ 战败前的穗积先生

创办人是穗积五一，他的弟弟叫穗积七郎，现在两个人都已经去世了。七郎战后作为日本社会党众议院的议员，致力于恢复中日邦交，因此在七郎的老家，七郎比起哥哥更有名，在中国可能也有人认识七郎。

在这里我称呼创办人为“穗积先生”。因为我们一直以来就这样叫，特别顺口，在这里请允许我继续这样称呼下去。

穗积先生在战前是个无职业者，曾经投身于日本的社会改革运动中。他毕业于东京大学法学系，大学同学几乎都就职于国家机关或担任大公司里的重要职位，只有先生一次也没有工作过，也一直没有结婚。他只顾着潜心于日本社会的改革。结婚也是在战后 44 岁的时候。

战前的日本，国内情况是农村非常贫穷，一片荒芜。对外又不断扩大对华以及在整个亚洲的战争。穗积先生认为这样的日本是没有希望的，于是力图改革。

他主张在支持明治维新以来近代日本体制的同时对日本社会进行改革。所以它不同于当时日本共产党等左派提出的意在推翻体制的革命。在思想方面可以称之为‘国家社会主义’。



穗积五一先生

■ 逃离烦闷

穗积先生的老家是爱知县的一个农村，是拥有着广阔山林的资产阶级家庭。因为父亲早逝（穗积先生 2 岁时，享年 52 岁）的缘故，家族内部发生了纠纷，最终妈妈被长孙赶出了家门。穗积先生上高中以后也被赶出了家门，和妈妈一起过着身无分文、非常困窘的日子。

这场家族纠纷发生在穗积先生幼年的时候，但却持续了很长时间，这给他幼小的心灵留下了很大的创伤。后来，在为中学升高中的考试作准备的阶段，先生得了肺病。自那以后，先生常常质疑惑道‘我是谁？’‘生命是什么？’，从而陷入深深的痛苦之中。这样的日子持续了大概 3 年，他终日无所作为、身心疲惫，直到有一天他突然对‘生命是什么？’的问题顿悟了，这种现象，从哲学的角度考虑可以称之为‘生命的直觉’。

一个人的生命本身如果丧失了自我，丧失了自我生存的意志，那么不管何人如何从外部伸出援助之手，仍然无法生存下去。这是生命最基本的特征，也是对所有生命都适用的原理。这个原理叫做‘生命的自立相’。

任何一种生命，在生存的自立原理的方面都是平等的。这便是‘生命的平等相’。因此，就生命而言，自立相等于平等相，这就意味着‘生命的自立相和平等相是同一的’。明白了这个道理以后，穗积先生就从痛苦当中走了出来。‘生命的直觉’成了穗积先生人生的重要精神支柱。

任何一种生命，不可以被剥夺自我生存的权利。同时，任何人也不能剥夺



日本改革时期的穗积先生

他人生存的权利。从这个意义上讲，可以说生命都是平等的。

可是在现实当中，一个生命要加害于其它生命才能得以生存。这是被科学证明的事实，也就是说科学事实与哲学真理之间存在着矛盾。于是为了生存，便产生了自我抑制，或是归依宗教。穗积先生的生活和社会改革运动都是在此基础上产生的。

■ 战争中

战前，日本在贵国的土地上建立起了‘满洲国’，实施了把日本农民移民到满洲国的

政策，对此穗积先生持反对态度。他说：“强制性地夺取中国人的土地，激起中国民愤的移民政策，我不能同意。”当时日本人都认为，满洲移民是解决日本农村问题方法，势在必行。站在日本领导人立场出来反对的，听说只有穗积先生一个人。正因为穗积先生思考过自己和他人生命的关系，所以这时才能够挺身而出吧。

穗积先生当然反对扩大对华战争的军事方针，同时也批判认为与美国的战争是鲁莽的。既然与美国开战了，那就要‘把战争变成是一场将亚洲从欧美的殖民地统治下解放出来的战争，只有这样，即使是战败了也值得’。要做到这一点，‘首先一定要让日本将朝鲜和台湾从殖民统治中解放出去’。

现在很多日本人把之前的这场战争说成是‘为了解放欧美殖民统治下的亚洲’的战争，却不说、也从来都没想过要把它称之为‘解放日本殖民统治下的朝鲜和台湾’的战争。而穗积先生却不同，他曾经秘密地收留过推进朝鲜独立运动的朝鲜青年，还对他们给予过援助。

其实在当时的日本，对战争持肯定态度的人当中，除了屈服于权力压力不得不赞成战争的人之外，还有两类人。一类是提倡将日本在亚洲的权益视为‘日本的生命线’，以保护和扩大这种权益为目的的人们，也就是发动并推动战争的人们。另一类则是由于当时日本领导阶层的腐败堕落，为了改善在日本社会蔓延的矛盾与问题，认为建立备战体制有利于改善日本国内矛盾的人们。当时，一提起‘反对战争’就会被关进监狱并被剥夺言论自由，因此穗积先生也认为‘在这种状况下，不能与战争作斗争’，于是他就选择致力于社会改造活动了。

■ 日本面对战败

穗积先生发起的运动，从以日本人为主体进行的社会改革这一点上看，并没能取得有效成果。

就这一点所进行的反省，对于穗积先生等人来说，也是战后的一个出发

点。可是能够做到这一点的人极为少见。众所周知，战败后的日本是在美国的统治下进行了大改革，大部分人趁这个时机把对自身的反省抛到了九霄云外。

比如，美国进行统治开始两年后的一段时间，曾经免除过战争领导者和国家主义者的公职。其人数高达 20 万，当时穗积先生也被列入国家主义者名单，遭到革职。战后世界，美国和苏联相对抗的东西冷战不断深化，特别是朝鲜战争开始以后，美国撤回了免除战前领导阶层公职的命令，有很多战前的领导者成为战后领导东山再起。大多数人都追随着美国政策的变化而变来变去，尤其是那些有知识、有文化的人。领导者和文化人的这种状况如今依然存在，而这不能不说这是评价今日日本这个国家性格特点的一个不可忽视的重点。

穗积先生是当时极为罕见的不被美国政策所左右的人之一，免除公职反而让他对历史进行了深刻的反省。

追溯战败后穗积先生在日本所走过的道路，最重要的莫过于和西光万吉先生的深厚友谊了。

在这里我要谈一件与主题稍微偏离的事。不知道大家有没有听说过日本的‘被歧视部落’。虽然同样是日本人，但是却断绝与一般日本人的一切日常交际。尤其在结婚和就业这两方面的歧视更为严重。这种歧视源于日本过去的身份等级差别，特别是封建的江户时代，政治及法律编制上的问题遗留下了这样的问题。由于他们从事的职业方面的问题，这些被歧视部落的居住地也是特定的，因此出现了在特定地区出生的人们受到歧视的现象。明治维新以后的近代日本，虽然在法律上废除了身份等级差别，但是在社会上仍然留下了极为顽固的印迹。明治维新后歧视现象虽然有所改善，但是歧视现象仍然残留至今。

到日本留学的学生，可能也不会了解得这么深刻。这位叫西光先生的人，就是被歧视部落出身。在日本，他是发起根除差别意识的‘全国水平社’运动的创始人。

穗积先生与西光先生以社会改革为共同目标，从战败前就已经开始交往，相互信赖，相互支持。穗积先生并没有因为西光先生的出身而疏远他，反而被他优秀的人格所打动，一生尊敬他，不断加深彼此的友情。日本战败的时候，西光先生自杀未遂造成残疾，此时穗积先生还是一如既往地鼓励他，还与他一起对历史问题进行了深刻的反省。

后来，穗积先生建立了从亚



西光万吉（左）和穗积先生

洲等地区的发展中国家接收留学生和技术研修生的机构，创立了 ABK，把自己毕生的精力都投入到经营 ABK 这项伟大的事业中去。

■ 个人的魅力与品格

有关 ABK，在前面已经有所提及，在这里我想从个人魅力，人品以及性格方面，再谈一谈关于穗积先生的事。通过以上对穗积先生的叙述，大家可能认为穗积先生是一个谨严，有礼貌，有绅士风格而又非常拘谨的人。我不能否认他有以上的性格，不过他也有与这些完全相反的性格。

战败前，穗积先生开展了改造日本社会的运动，他把东京大学正门前原来的旧木屋宿舍取名为‘至轩寮’，并把它做为开展活动的据点，与年轻的弟子们住在一起。战败后变成了学生宿舍，名字也改为‘新星学寮’。这个‘新星学寮’现在也还在，目前我就住在那里。

新星学生宿舍（旧）



新星学生宿舍（现在）



新星学生宿舍（生活）

这座木屋非常古老，虽然战后不久修建过一次，不过依然是木质结构，厨房和卫生间是大家合用的。穗积先生的房子虽然住在另一栋房子里，但是与学生宿舍紧挨着。他家一楼有个大房间，学生集会总是在那里举行。穗积先生与他的家人一直住在那里，在那里度过了一生。

穗积先生下班回家后，总是穿着睡衣躺在一楼大间靠墙的长板凳上，有时还让别人给他扎针灸。也有时会拿出扑克牌算卦，他深信多多使用手指能够增加大脑的灵活性。穗积先生还是个特别怕热的人，夏天他只穿一条短裤，还要把短裤底边都高高卷起。他还非常疼爱误闯进来的野猫，他说：‘猫睡觉的地方是最凉快的。’就这样穿着一条短裤与猫一起躺在通风好的地方。

在 ABK，穗积先生走在路上，只要看见掉在地上的垃圾，一定要捡起来。在食堂，看见学生吃剩下的食物，就会说：‘动过筷子的东西一定要把它吃完。’说完他自己就把食物吃掉了。

在 ABK 工作的时候，只要工作告一段落，他肯定会大声地跟我说：“工藤君，一起回家吧！”还对其他职员说：“大家也回去吧，不要只顾着工作。”当时我是独身一人，借住在穗积先生宿舍的一室，让岁数大的人一个人回去觉得有点不安，于是时不时陪他一起回家。可是面对着归家心切却还继续工作的其他职员，又觉得于心不忍，这使我左右为难。可是后来回顾穗积先生去世前后的事情，这才恍然大悟，终于明白穗积先生话中的深刻含义了。

有一天，陪穗积先生一起回家的途中，发生了这样一件事。先生问我：“喂，工藤君，你知道‘强者拒人于千里之外’的意思吗？”当时我觉得，大概就是总发表一些正论、坚持己见、不甘示弱的人，即使久别重逢也丝毫不让人感到亲切这样的意思。可是当他这么问我，我才恍然大悟，‘原来先生说的就是我呀’。这已经是过去的事了，不过就像昨天发生的一样，让我想起来就感到羞愧。下面，回到建设 ABK 的话题上去吧。

穗积先生和我（左）



■ 建设秘话——和新中国的留学生交流

在ABK的建设中，有几件事起了非常重要的作用。其中一件就是ABK从新中国接收留学生的事，当然这件事在当时并不为人所知。

从战后10年的1955年起，穗积先生应朋友的邀请，出任日中友好协会的常务理事，长达数年。先生主要负责学生青年会对策委员会的工作。穗积先生意识到作为战败国的日本，从新中国接收留学生具有多么重大的历史意义和政治意义，于是决定把为留学生提供住宿做为ABK工作的核心。

1958年中国红十字会代表团访问日本的时候，中日友好协会的相关人员廖承志、赵安博、肖向前等人加入了代表团行列，当时穗积先生拜访过他们，并告诉他们，为了迎接中国的留学生，‘我已经建好会馆，做好一切准备，就等着他们的到来’。然而，迎接中国留学生的事进展得并不顺利。就在日中两国回复正常邦交的呼声日益高涨，实现邦交正常化指日可待之时，妨碍邦交正常化的日本一小部分破坏势力，在长崎市发动了侮辱中国国旗事件，其结果是日中两国关系遭到全面冻结，中国学生留学日本的希望也破灭了。

ABK的建设工作虽然以接受新中国的留学生为中心，但是整体上它仍然是要面向亚洲的，尤其是要以接受发展中国家的留学生为目标展开工作，因此ABK的建设计划并没有停滞，而是按照原计划进行。

由于日中关系的倒退，阻碍会馆建设的冲击力量也开始减弱，就在这时，没有料到日本政府通产省提出了一个要求，希望计划建设的

留学生会馆以后也接纳技术研修生。穗积先生以人事权（不受政府指派）和会馆经营方针不变为条件，表示因为有利于“培养亚洲等发展中国家的技术人才”，于是接受了日本政府通产省的要求。

就这样，ABK于1960年6月成立了，当时还没有来自新中国的留学生。战后的日本正式迎接来自新中国的留学生是在1979年的春天，那是1978年签订“日中友好和平条约”后的第二年，ABK整整等了20年。而今年正好是日中友好和平条约签订30周年。

1979年春天，穗积先生迎来第一批中国留学生时，他对ABK设立之初沿用下来的‘一个国家只接收2名以内留学生’的规定作了变通，一下子接收了18名。光靠ABK本馆的房间已经不够了，于是把就近的职员宿舍也腾了出来。到了第二年的春天，ABK已经没有接收新留学生的宿舍了。于是在一个叫做大森的地方，借用了一个公司的职员宿舍，准备了可容纳50人的宿舍，我们把这个宿舍叫做‘大森寮’。还有，为了掌握包括多所大学在内的留学生接收的整体情况，穗积先生计划成立一个‘中日留学生交流协会’（中留协）。为此，他亲自到东京大学、关西的京都大学和大阪大学进行了演说。这一举动，充分地体现了穗积先生迫切希望新中国留学生到来的心情。可是1981年的夏



技术研究生

天，由他掀起的活动开展得正红火的时候，先生突然去世，中留协也就中途搁浅了。

今天这个会场里，当时的留学生以及当时负责照顾留学生的领事馆工作人员的各位朋友都来了，我内心激动，无比感激。

从1990年4月到2002年3月的12年期间，ABK受东京都的委托，经营了东京都建设的中国留学生宿舍‘东京都太田纪念馆’。这个纪念馆是为了纪念东京都和北京市结为友好城市而建成的。当时一起生活过的OB, OG的朋友们今天也来到了这个会场，在这里请允许我向他们表示由衷的谢意。

由民间经营的公益事业

■ 与穗积先生的相遇

请大家看一下表格1，这张表对战后日本重新开始接收留学生的初期动态进行了追踪。

<表1 战后初期接收留学生小史（战败～20世纪60年代）>

年	留学生	制度等
1945 (S20)	(战败)	
1954 (S29)		开始自费留学生制度，院系预备教育1年制（东京外大）
1955 (S30)	公费生同盟罢课要求增加助学金	4月 财团法人日本国际教育协会创立 <9月财团法人亚洲学生文化协会设立> 11月 驹场留学生会馆竣工
1957 (S32)		
1960 (S35)		4月 公费生院系预备教育3年制（千叶大学及东京外大） 和印度尼西亚留学生赔偿制度 <6月亚洲文化会馆竣工>
1961 (S36)	2月 千叶大学留学生罢课运动 12月 留学生在《中央公论》投诉文部省	6月 千叶大学留学生宿舍竣工
1962 (S37)	5月 千叶大学留学生罢课运动 9月 Cheah君事件（马来亚・千叶大学）	<6月 开办亚文协东京留学生联谊会> 7月 设立文部省留学生科 <9月 开展改善留学生问题座谈会>
1963 (S38)	3月 国际学友会上发生留学生联合抵制饭食费上涨运动	8月 开展东京YWCA留学生母亲运动
1964 (S39)	5月 千叶大学发生有关女生宿舍的联合抵制运动	
1965 (S40)	2月 越南留学生反对北爆示威活动	<3月 开展四会馆运营座谈会>
1966 (S41)	印度尼西亚留学生失踪事件（早稻田大学） 强制遣返Cheng君（马拉西亚・千叶大学）	
1967 (S42)	Vu君事件（越南・东京大学）	<7月 改善留学生问题座谈会第四次会议举行，提出留学生身份保障提案>
1968 (S43)	1月 公费生向文部省递交提高助学金申请	6月 JAFSA成立
1969 (S44)	“～平连”事件（越南・24名，东京大学・东京工业大学及其他大学）	
1970 (S45)	刘彩品事件（中国・台湾，东京大学）	公费生预备教育修改回1年制（东京外大）

通过表格大家可以清楚地看到，以1964年中期为界，留学生的动态有了质的巨大的变化。这和表格右边一栏7月份‘文部省设置留学生课’这件事并没有什么关系，实际上是主要是因为60年代穗积先生创立ABK起到了很大的作用。表格右侧栏写着，1964年6月‘举办亚文协在京留学生联谊会’，9月‘召开改善留学生问题畅谈会’。‘亚文协’是我们的财团法人“亚洲学生文化协会”的简称，以上这些活动都是在穗积先生的主导下进行的。

在那之前，不得不采取罢课、联合抵制等手段来斗争的留学生们，也终于可以越来越多地期待通过谈话来解决问题了。

从那时起，亚洲的政治格局发生了不小的变动。1963年马来亚重组为马来西亚联邦，1965年美国发动越南战争，印度尼西亚发生政变，还有1971年中国重返联合国等。

祖国发生的政治变动也给留学生们带来了影响。其影响反映在1964年下半年开始的留学生‘事件’上。

就在这样的一个变动之年，1964年春天，我受朋友的邀请，入住新星学寮，首次与穗积先生见面。之后，一连串的留学生在日逗留问题，即表格里的‘Cheah君事件’‘Vu君事件’‘～平连事件’‘刘彩品事件’等事件，我们都扯上了些关系。现在回想起来，这些事件如果不是ABK和我们在从中调节，也许就不会以现在的面貌出现在日本社会了。



Cheah君事件



刘彩品事件

■ 与亚洲留学生的相遇

住进穗积先生的宿舍时我正在东京大学上3年级，正赶上4月，刚好是换校区的时候。我的专业是电气工程，大学毕业以后，我继续攻读了硕士课程。因此，参与‘Cheah Soo Lin君事件’和‘Vu Tat Thang君事件’是在我的学生时代。

‘Vu 君事件’起源于越南留学生在东京举行的反对美国发动战争的示威游行。1965 年 2 月，美国向越南北部发起了炮击，仅仅过了 6 天，当时在日本留学的越南留学生约 200 名就从日本各地集聚到东京，高举“不要残杀同民族的越南人”的标语，在日本政府机关集中的霞关大道上，进行示威游行。组织游行的人是当时在日越南留学生会的会长，是跟我同一时间入住到穗积先生宿舍的东大留学生。

参加游行的学生当中有一个人名字叫做 Vu，当时在日南越南领事馆不给他办理护照延期。在这种情况下，他无法继续在日本逗留。如果留学资格不被承认、被强行送回国的话，我们想他只有死路一条。



越南留学生示威游行运动



街头签名活动

这一事件登报以后，不到四天的时间，广岛的学生代表收集了 2000 名学生在救命请愿书的署名来到东京。因为组织示威游行的人住在我们的宿舍里，所以我们在宿舍的大厅接待了那个学生代表。他告诉我们，回到广岛他要继续进行署名运动，直到收集到一万个署名为止。

我听到那个学生代表的话，忍不住脱口而出：“在广岛收集一万个的话，在东京我们不得收集 10 万个署名啊。”一直坐在大厅角落、习惯性地默默地翻扑克牌的穗积先生，此时不失时机地插进来，叮嘱我道：“工藤君，10 万个是你说的啊，君子一言，驷马难追”。

我暗暗下了决心，跟曾经参加过支援 ‘Cheah 君事件’ 运动的住宿生一起，组成了‘保护 Vu 君之会’，在全国展开了署名运动，收集了 10 万个的署名。

保护Vu君会会长（阿萨比顾拉夫）



是不同的。还有一点是，通过亚洲人的眼睛，我看到了近代日本在亚洲一路走来的‘历史’。

我在‘Vu君事件’圆满解决以后到来的那个春天里，从研究生院毕业，正式加入ABK工作。那是在1968年4月，正好是40年前的事了。我没有选择自己的专业电气工程这条路，是因为当时我的兴趣已经转移到怎样建设一个“与亚洲共存的日本”这一方向上来了。

■ 难忘的房间

下面我再举一个例子，介绍一个我参加过的活动，让大家了解一下ABK的活动方式。

那是10年前的事情了吧。一个春天的傍晚，我碰巧一个人留在ABK的时候，接待了一个留学生的到访。早已过了5点，他显得特别疲惫，声音也是断断续续的。他告诉我说：‘我报考了东京大学的研究生，从名古屋来到东京找房子，可是已经过了一个星期还找不到，于是想干脆打道回府，放弃留学回国算了。’这时有人告诉他可以到亚洲文化会馆（ABK）问问，于是他就找来了。

他以前是国费留学生（日本政府文部科学省奖学生），升上研究生院后就得自费了，还得自己找住处。他做梦也没有想到自己会陷入这样的困境，当初还打算顺便游览一下东京，骑着个摩托车就飞奔过来了。

对此，我也只能回答这里也没有空房间，但是好不容易才找到ABK的，让

当时我还向家里人伸出了求助之手，包括老家的父母、已参加工作的两个哥哥、读高中和初中的两个妹妹，还有小学同学，甚至所有朋友们和认识的人。

后来，在东大留学的Vu君还获得了时任东大校长的大河内一南先生特别向法务大臣申请的在留许可资格，获得特批，‘Vu君事件’终得平息。

我通过‘Cheah君事件’和‘Vu君事件’和亚洲留学生成为了朋友，同时跟他们学了很多东西。收获最大的一点是，我从他们身上知道了怎样才是一个独立的人，这与日本人的做事风格

他就这么空手而归的确有些于心不忍。于是抱着胳膊开始想办法。

过了一会儿，我想起了在离都心不太远的地方有一位经营园艺农场的学长。他在战败前是穗积先生门下的弟子，和先生一起参加了很多活动。打电话一询问，对方的回答是‘本人愿意的话就可以’，于是我告诉他：‘新学期马上要开始了，你必须得到东京来。在你找到固定住处之前，可以在熟人农场的小屋里凑合住一下’。

无论如何，我觉得有必要带他看一下房子，而且也应该先介绍他和学长认识，于是带着他出发了。突然下起雨来，挺冷的。

到了农场已经是晚上 9 点了。我以前曾经参观过，知道这里的小屋在农场繁忙的时候经常借给帮工的人住，虽然狭窄不过干净整洁。我心里很过意不去，但是对那个青年来说这真可以称得上是雪中送炭了。他心中石头落地，当晚就骑摩托车回名古屋去做上京的准备了。

我原以为那无论如何都只不过是在找到固定的住处之前的一个临时栖身之所罢了；后来听说他直到念完研究生回国，一直都住在那里。也许是因为学长待他如同家人一样吧。

给留学生介绍这样的房子，其实是做得很失礼的。幸好事情圆满结束，我也放下一桩心事。而且，今天，我还能在这里为大家讲述当时的情景。

■ 何以让民间人士承担

提起公益事业的实施者，人们一般都会想到志愿者。其实他们并不一定都是抱有志愿精神的。不过，在这里，志愿者指的是‘不受雇佣关系的约束，根据自己的意志寻找课题并加以完成的人’。

政府方面公益事业的工作人员大都是受雇佣的有职务由工资的公职人员。这与志愿者的概念正好相反。一般说来，政府体系有个鲜明的特点，志愿者式的工作受到限制，唯有官僚式的行动方式才得到许可（当然，这样可以确保其持续性和公平性）。

那么，纯民间怎样呢？简而言之，就是多样。既有无报酬的实施者，也有有报酬的。我也是领取报酬的。有报酬的人当中，有的是官僚性质的，有的刚开始并非官僚，年数长了就渐渐变成官僚了。

但是，拿取报酬的也不一定就是官僚性质的。带着志愿者精神的人还是不少的。纯民间的公益事业本身财政来源比较紧张，因为很多时候开展的都是无收入的志愿活动。尽管如此，还是有人认为这样也是值得的。

那么，普通民众为什么要参与到不图经济效益的公益事业当中来呢？我认识一位长年经营企业的前辈。他在退休的时候说道：“不想再挣钱了，今后想做一些对社会有用的事情。”于是，他把自己的财产拿出来，创立了亚洲留学生奖学财团。

一位女性，原来一直在奖学财团工作。但她辞掉了这样一份身份安定有保障的工作，创办了一个与亚洲留学生交流的志愿者团体，一边募集小额捐款，一边无偿地工作。

还有，日本泡沫经济形势大好时期，一家有名的保险公司的科长，有众多部下追随，报酬丰厚，正处在人生发展的绝好时期，却突然辞掉工作，跟我们说他想做跟国际合作相关的工作。

以上列举的三个人的共同点都是放弃了经济利益。可是，如果要问他们为什么要投身到没有经济利益的公益事业，我想他们的回答是不尽相同的。

有一种说法是，社会事业的志愿者其实也不过是为了得到报酬而工作罢了。在这里，所谓的报酬，并非指经济方面的，而是包括了更广泛的含义。

具体解释起来就是，他们在追求自己选择的价值的同时，在内心深处会感到空虚。通过志愿者活动，从他人那里获取一种报酬，这种报酬无法用金钱来衡量，也是预料不到的，可能是‘人与人之间的交流’，或者是‘信息’等一类的东西。

现实中已经出现了这样的回报形式。即志愿活动虽然不会带来金钱储蓄，但是根据所花的时间长短会有‘时间储蓄’。志愿者可以在必要时把它用掉，从别的志愿者那里得到服务。

可是，这一说法我认为并不合适。在追求自己所追求的目标的时候，内心的确会感到空虚，这点我没有异议。可是，只有从别人那里得到的报酬才能填补空虚的说法，我觉得值得商榷。

今年，来自缅甸的留学生为了支援5月初祖国洪灾灾区重建家园，走到街头进行募捐活动，我也加入了他们的行列。可是，没有一个人是为了回应我们的招呼或者请求而进行捐助的。一般都是看到这边有个什么活动之后就走过来，往募捐箱里放钱，无所谓我们有无谢意，就悄悄地离开。

当时我就想，“他们的心里头也有空缺，可是弥补这空缺的，不是从别人那里得到的什么报答，而是捐赠这种自发的行动。”也就是说，不靠从别人那里得到的报答，而是用自己的行动来弥补空缺。

有些人是通过别人的报答感到满足而继续从事志愿者活动，但也一定有那么些人，如果不靠自己的行动，则无法感到充实。

普通民众为何参与公益事业？这个问题的答案就是，肯定有这么一些人，在确立目标、立志实现理想的过程中，内心深处出现了空缺，一个不用自己的实际行动就无法填补的空缺。也许我们应该说，这才是志愿者心理需求的中心吧。

不这么考虑的话，就无法很好地解释这种奇怪的现象：为什么有的志愿者没有报酬却丧失了志愿精神，有的志愿者即使领取着报酬却仍然不忘志愿精神。

结尾

最后，我想谈一下自己与亚洲留学生 40 年交往中所感受到的变化，以及就今日的日本稍微谈一下自己的看法。

■ 没有言论自由

现在我最担心的是，在今天的日本，留学生不能自由发表言论的风气正在扩散、变浓。战后的日本，刚开始接收留学生的时候，由于受到战后经济萧条的影响，宿舍等一切设施设备都不完善，当时的留学生不得不过着非常艰苦的生活。

可是，他们能自由地发表看法，如果交流出现了问题，他们还能选择罢课、联合抵制的实际行动来表达不满。通过刚才的表格也能清楚地看到这一点。而且，言论的内容是无法压抑的真切心情，决不是趁机抓住战后日本的弱点进行攻击。

跟那时候相比，今天留学生的接收工作，无论是制度方面还是与留学生交流的人数方面，都有了显著的改善，并且人数也扩充了很多。那么，跟那时候相比，留学生的言论自由以及相互理解的深度，是不是有了很大的进展呢？其实不然。

说到日常的流行话题等的时候，看起来能谈得很起劲，而一旦涉及到国家与民族的话题，或者被问及心中真实的想法时，想顶住周围的压力对日本人以及日本社会通常的论调“斗胆说点什么”的话就很难了。

也就是说，在当今的日本，亚洲的留学生自由陈述看法的行为有时并不被允许。我们感到，所有的留学生们为了尽量避免表现突出而遭到欺负，都小心地藏匿着想法。

战后不久，所有的日本人都发誓‘要创造一个与亚洲共存的日本’。可是，随着 60 年代经济高度成长开始出现问题，80 年代因泡沫经济和日元汇率上涨，人们的思想变得更加自私，失去了为别人着想的谦虚的心态，很多日本人都开始过分强调自己的想法。我非常担心这样下去日本终将走向孤立。

■ 留学生 30 万人计划

有关留学生的重要动态，我也来进行一点说明。

今年夏天，日本政府发表了一份计划，到 2020 年将接收的留学生的数量提高到 30 万。现在的留学生人数不到 12 万，仅仅 12 年内要做到增加 3 倍，也就是增加 20 万人。

其实，1980 年也曾经制定过类似的方针。当年留学生人数是 1 万人左右，

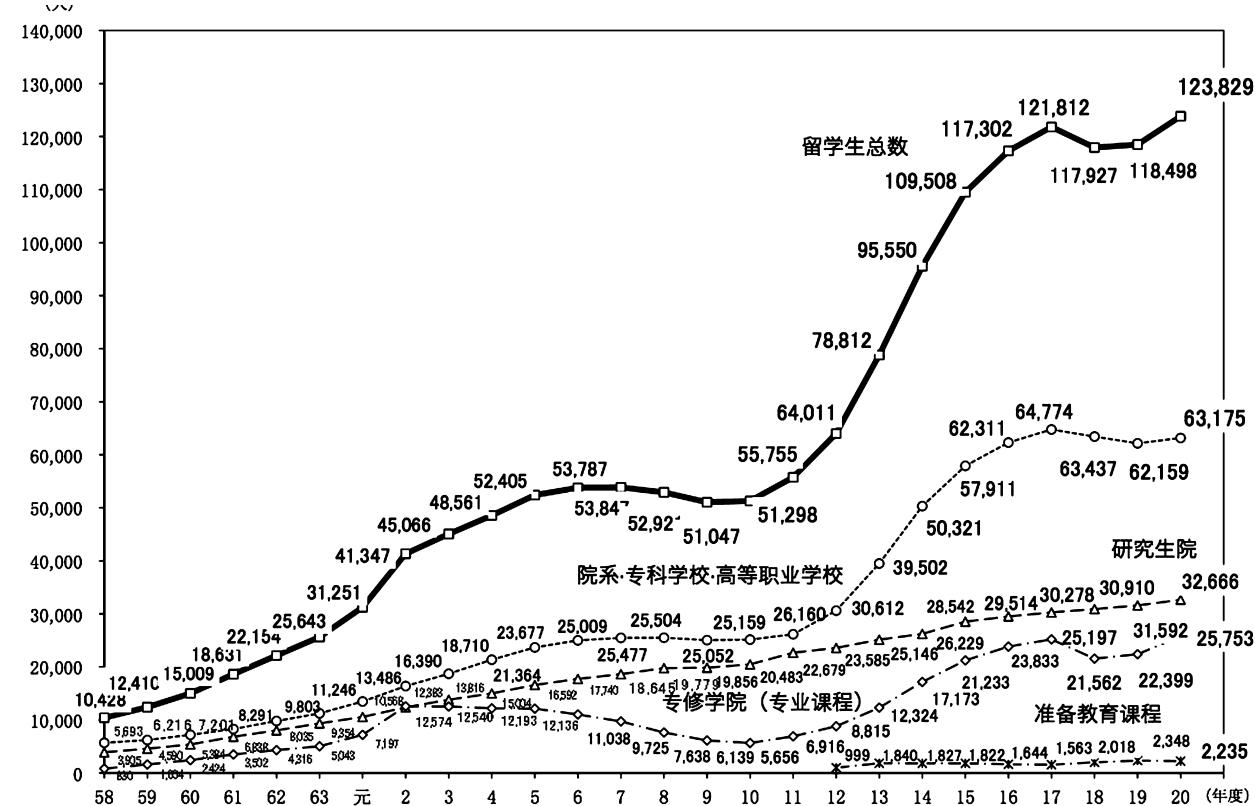
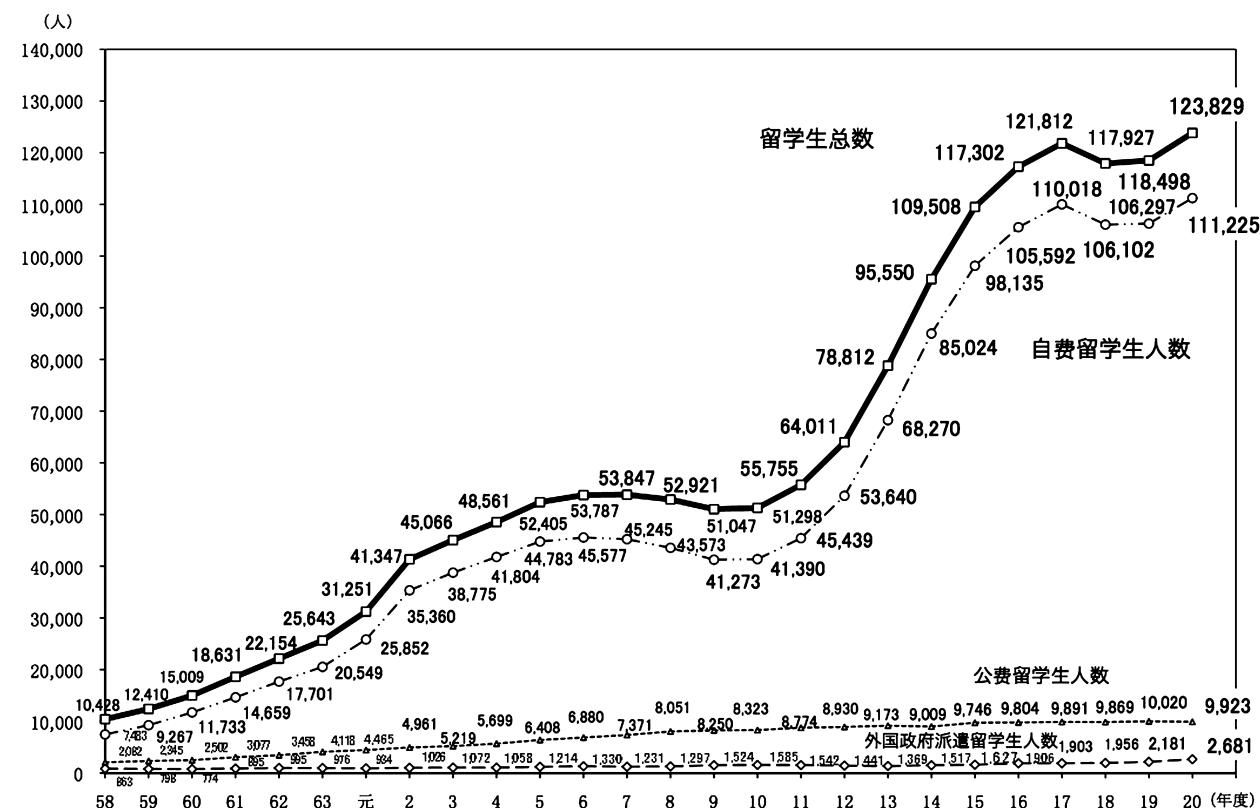
而在 21 世纪初时则说要增加到 10 万。这个方针的结果就是，今日的留学生人数已经达到约 12 万。(参照图 1)

那么，为何要制定扩充留学生人数的方针呢？关于其原因，80 年代和现在

图 1 留学生总数走势

JASSO 提供 (2008 年)

又不一样。



80年代，日本从国际上接收一些有利于经济发展的人才进行培养，这是从提高本国外交实力的政治意图出发的。

而且，这也是一个非常现实的问题。因日本人18岁青年人口减少，大学教育资源出现余裕。可能在座的各位中已经有人听说过这个“留学生10万人计划”了。

另一方面，今天的‘留学生30万人计划’，提倡‘扩大接收海外优秀人才到日本的大学院和到日本的企业就职’。从这个口号中也不难看出，这是有出自社会经济方面的考虑的。日本人生育率的降低给研究工作以及经济活动带来了人才不足的问题，这个空缺将由外国人来弥补。

实际上，现在，促进留学生加入日企的计划正以多种多样的形式展开。在日语教育方面也增加了教授‘商业日语’的课程。为了鼓励学生到日本企业工作，甚至高唱‘追求高端技术是为了亚洲诸国的利益’，大力进行宣传。似乎以资本积累为目的的企业活动也简直要被说成是公益活动了，当然，从事公益事业的财团法人也得事先准备好资金。

留学生和亚洲各国对日本的政策反应如何，这是日本无法干预的，我在这里也没法评论。

一方面，我们ABK队伍中也有一部分人认为政府公布的“留学生30万人计划”里包括了‘充实日本语教育’和‘支援回国留学生同学会的组织化’等内容，在具体政策上与ABK将要开展的具体对策有较广范围上的重合之处，这将为ABK改革打开有利的局面，因此表示欢迎。

ABK促进留学生交流的理念是，创造日本以及亚洲各国社会的灵活性。这与‘留学生30万人的计划’的理念是不同的。

这次的‘留学生30万人计划’是日本政府首次表示要把留学生的接收工作具体放置于维持和发展日本社会的目的之下。这给人们留下了日本正处于历史性转折点的印象。

也许有人会反驳道：“美国早就那样了，用不着吵吵嚷嚷大惊小怪吧。”可是大家都知道，在美国，留学生也好，任何一个外国人也好，都是构成这个国家的一名成员，也就是一名家庭成员。美国的国情如此。换了日本究竟会怎么样呢？

我认为‘留学生30万人的计划’，在几个方面是需要警惕的。其一，这个政策的本质上看隐隐约约有些‘满洲移民的翻版’的味道，即‘劳动力过剩时代的满洲移民、劳动力不足时代的30万人计划’。不能太恣意任性了，不然报应来了就该慌张了。

■ 新的研究态度

虽然是这么想，但我不认为日本政府在犯和战前一样的错误。战后，在美

国的统治下，日本的社会进行了一场大的改革。

对此表示反抗的一部分国粹主义势力企图要回到战败前的日本，可是改革了的东西，有的已经回复不到原样了，因此说要让今天的日本立刻恢复成战败前的样子的，未免也想得太过于简单了。我们有必要踏踏实实地对今天的日本进行一下研究。

上述的说法，同样适用于日本人的中国观。如果不对改革开放以后的现代中国进行研究而随便发表评论的话，不仅观点无法为大家所接受，还会贻笑大方的。

我要向在座的大家呼吁，让我们以全新的姿态，努力推进日本研究以及中国研究吧！

如果大家有什么具体的建议，我想将其具体纳入到ABK现在正推行的改革当中，作为文化交流的一个环节，进行认真的研讨。

我今天的演讲到此为止。非常感谢大家的聆听。

后记

第三届 SGRA 中国论坛报告

一灯燃亮万灯

协会与亚州留学生共同走过的 50 年

今西淳子

第三届中国论坛分别在中国延边大学综合楼七阶报告厅（9月26日）及北京大学外国语学院没住楼（9月28日）圆满召开。本次论坛是继2006年在北京大学举办的公开座谈会“青年的未来和日语”，2007年在北京大学和新疆大学分别举办的公开演讲“黄土高原绿化合作十五年：从不理解、失败到相互理解和信任”（演讲人：绿色地球联盟高见邦夫事务局长）之后的第三次SGRA论坛。本次，亚洲留学生协会（ABK）常务理事工藤正司先生就协会创建者穗積五一先生的创建思想，日本和亚洲的联系、一般市民的活动意义进行讲话。开场，工藤先生对于日本战前行为的反省，介绍协会创建者穗積五一设立「战后新日本」的构想，说道：“本该从贵国的发展状况的赞词开始这次讲话的，但我更想诚心诚意地为日本过去对中国所作所为道歉。”“今天我要谈的是关于我的协会和协会创始者的事，不是为了赞扬，不是为了宣传。希望通过了解协会和其创建者来了日本人作为战败国的国民在想些什么，做了些什么，现在又在做什么？并和大家一同来思考『在民间实行公益事业』的意义。希望今天的讲话，可以对大家有所帮助。”之后是用幻灯片的形式向我们讲述了协会的发展和工藤先生的自身经历。最后，提出[当前在日本的留学生不能自由的发言][没有明确的移民政策，但为了缓解日本劳动力不足问题大量引进留学生数（留学生30万人计划），这不是很危险吗？][日本和中国都对对方的很多地方了解不足，有必要以新的态度对彼此的现状进行更多的研究]等问题，也提到[如果有具体的方案，我认为对ABK现在推进的改革作为文化交流的一环编入之事，准备进行认真探讨]。延边大学论坛的参加者主要是国际政治学专科的学生，约150人，对有关日本和中国的教育差别，学生的差别等问题进行了提问。北京大学的论坛参加人员是以日语学习者为中心，有来自北京大学，北京第二外国语学院，北京语言大学，北京人民大学的学生，ABK，太田纪念馆里正在日本留学的学生，屋美财团的屋美理事长，等80参加。大学的日语系学生可以用很流利的日语提问，这点让我很吃惊。延边大学的金香海和北京大学的孙建军都很衷心的感谢这两次的论坛的召开。并感谢SGRA的会员，吴东镐，金熙，张绍敏，朴贞姬，冯凯，宋刚。（今西淳子）



延边大学的金香海的讲话

延边大学的论坛会时，在讲演之后，工藤先生对于学生们感兴趣的话题作了热心的回答，会场气氛十分活跃。之后，30名参加者又在日本国际交流基金的支援下成立的〔延边大学日中交流会〕举行了茶话会，工藤先生有就日中学生的气质差异，日语教育的话题进行了讲解，气氛很愉快。我认为，能得到这么大的共鸣，全在于工藤先生的精彩的演讲内容和他的个人魅力。日本和亚洲有这悠久的分化交流的历史。日本的通过明治维新和西洋同时成为近代国家，这个过程中，日本否定了亚洲，推崇西方的价值观要想建立〔空想帝国〕，但失败了。之后，虽然借鉴美国的价值观成为了发达国家，但途中也产生很多不正确的想法。这也正是ABK创建者穗积先生发现日本社会的疾病，在战败后立即成立〔为了亚洲〕亚洲留学生支援机构的原因。工藤先生坚信：日本的再生，以及亚洲的价值的恢复和创造会从学生们群体性民主的交流作未来时开始，如〔一灯燃亮万灯〕般，不断扩大。我很敬佩工藤先生的高尚的人格和他对文明的深刻理解。

北京大学的孙建军相声的讲话

这是一次让我对〔留学〕进行深刻思考的讲话。向往外国的先进技术和富足的生活，或是为了学习外语，更好的作研究而想去留学的人得多，也有很多人已经实现了留学的梦想。和只考虑到自己生活而入留学的人不同，工藤先生所在的ABK是为了整顿留学环境奋斗了50年。日本国内政治动态，国际关系的变化之下一直深深坚守着一个信念——〔为了留学生〕。像ABK这样的组织，给了亚洲学生无比的信心。会场聚集了很多在ABK的帮助下中国留学生，这也是ABK有很想的向心力的表现。在听讲演的时候，我在想，不时有富足的精神生活的人是不会成立NPO活动的。留学让我知道了有NPO的存在，并积极地参与了。仅是在这种富足的精神力量的旁边，我已经得到了很多鼓励。同时也切实的感受到，必须不断提高自己的精神思想。

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート 01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート 02 CISV国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」 今西淳子、高偉俊、F.マキト、金雄熙、李來贊 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート 03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート 04 第1回フォーラム講演録 「地球市民への皆さんへ」 関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート 05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」 平川均、F.マキト、李鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート 06 投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート 07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」 木村建一、D.パート、高偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート 08 第4回フォーラム講演録 「IT教育革命：ITは教育をどう変えるか」 白井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蒋惠玲、楊接期、李來贊、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート 09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」 ペマ・ギャルポ、林泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート 10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」 S.ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート 11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート 12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」 建石隆太郎、B.ブレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート 13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F.マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート 14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 +宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション 平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・ブートゥラ、孟健軍、B.ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート 15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 吳東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート 16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート 17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」 白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート 18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート 19 投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴榮濬 2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート 20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」 外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート 21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート 22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート 23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」 宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート 24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート 25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」 斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎧、F.マキト、金雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート 26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート 27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」 竹田いさみ、R.エルドリッヂ、朴榮濬、渡辺剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行

- SGRA レポート 28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか-地球市民の義務教育-」
宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」 李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート 30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート 31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トゥ、範建亭、白寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート 32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラバーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、角田英一
2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート 33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート 34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島薗進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、セリム・ユジェル・ギュレチ
2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート 35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮尚、李海峰、中西徹、外岡豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート 36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート 37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張潤北、徐向東、孫建軍、朴貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート 38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金範洙、趙寛子、玄大松、小針進、南基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住真、韓東育、趙寛子、林少陽、孫軍悅 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート 40 第27回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島薗進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15年—無理解と失敗から相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29回フォーラム講演録 「広告と社会の複雑な関係」
閔沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」
佐藤香、山口真美、シム・チュン・キヤット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水諭 池田慎太郎 朴榮濬 劉傑 南基正 2008. 8. 8 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA事務局（Tel : 03-3943-7612 Email : sgra.office@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRA レポート No. 0048

第3回 SGRA チャイナ・フォーラム
一燈やがて万燈となる如く：
アジアの留学生と生活を共にした協会の50年

編集・発行 関口グローバル研究会(SGRA)
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8 (財)渥美国際交流奨学財団内
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: <http://wwwaisf.or.jp/sgra/>
電子メール: sgra-office@aisf.or.jp

発行日 2009年4月15日
発行責任者 今西淳子
印刷 藤印刷